

(注：本翻訳資料は外国人生徒の日本語指導用に作られたものです。)

中国語訳/劉穎<日中文化サロン守山 <https://shiga-chinese-class.netlify.com/>>

国語 3

中学 3 年/教科書 光村図書

目次

詩：世界はうつくしい 長田弘

この教科書で学習するみなさんへ
教科書の構成

本編

1. 深める学びへ
2. 視野を広げて
情報社会を生きる
3. 言葉とともに
読書生活を豊かに
4. 状況の中で
5. 自らの考えを
6. いにしえの心を受け継ぐ
7. 価値を生み出す
読書に親しむ
8. 未来へ向かって

文法・漢字・振り返り
学習を広げる（巻末）



国语 3

高中 3 年/教科书

光村图书

目录

诗：这个世界很美丽 作者：长田弘

至学习此教材的同学们

教科书的构成

本篇

1. 加深学习
2. 扩大视野
 怎样生活在信息社会
3. 与语言同在
 让读书生活丰富多彩
4. 在各种情况下
5. 有自己的思想
6. 继承往昔的精神
7. 创造价值
 热爱读书
8. 面向未来

语法・汉字・复习

扩展知识（卷末）

（注：本翻译资料用于外国学生的日语指导，仅供参考。）

中文翻译/刘颖<守山日中文化沙龙 <https://shiga-chinese-class.netlify.com/>>

詩/原文

「世界はうつくしいと」 ^{ながたひろ}長田弘

うつくしいものの ^{はなし}話をしよう。

いつからだろう。ふと ^き気がつくと、
うつくしいということばを、ためらわず
^{くち}口にすることを、^{だれ}誰もしなくなった。

そうしてわたしたちの ^{かいわ}会話は ^{まず}貧しくなった。

うつくしいものをうつくしいと ^い言おう。

^{かぜ}風 ^{にお}の匂いはうつくしいと。 ^{けいこく}溪谷の

^{いし}石 ^{つた}を伝わってゆく ^{なが}流れはうつくしいと。

^{ごご}午後の ^{くさ}草に ^お落ちている ^{くも}雲の ^{かげ}影はうつくしいと。

^{とお}遠くの ^{ひく}低い ^{やまなみ}山並みの ^{しず}静けさはうつくしいと。

きらめく ^{かわべ}川辺の ^{ひか}光りはうつくしいと。

おおきな ^き樹のある ^{まち}街の ^{とお}通りはうつくしいと。

^ゆ行き ^か交いの、なにげない ^{あいさつ}挨拶はうつくしいと。

^{はなばな}花々があって、^{おくゆ}奥行きのある ^{ろじ}路地はうつくしいと。

^{あめ}雨の ^ひ日の、^{いえいえ}家々の ^{やね}屋根の ^{いろ}色はうつくしいと。

^{ふと}太い ^{えだ}枝を ^{そら}空いっぱい ^にひろげる

ばんしゅう ふるでら おおいちょう
晩秋の古寺の、大銀杏はうつくしいと。

ふゆ
冬がくるまえの、曇り日の、

なんてん ちい あか み
南天の、小さな朱い実はうつくしいと。

コムラサキの、実のむらさきはうつくしいと。

す きせつ
過ぎてゆく季節はうつくしいと。

きれいに お すがた
老いてゆく人の姿はうつくしいと。

いったい ひ び はへん
一体、ニュースとよばれる日々の破片が、

わたしたちの れきし い
わたしたちの歴史と言うようなものだろうか。

あざやかな まいにち か ち
あざやかな毎日こそ、わたしたちの価値だ。

うつくしいものをうつくしいと言おう。

おさな ねこ いっこく
幼い猫とあそぶ一刻はうつくしいと。

シュロの えだ も はい ま
シュロの枝を燃やして、灰にして、撒く。

なに えいえん
何ひとつ永遠なんてなく、いつか

すべて ちり せかい
すべて塵にかえるのだから、世界はうつくしいと。



中文翻译

诗：这个世界很美丽 作者：长田弘

我们来谈谈“美丽”的话题吧
不知从何时开始 突然发现
已经没有人 毫无顾忌地
使用“美丽”这个字眼
于是我们的话语变得贫乏无味

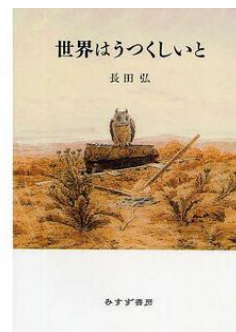
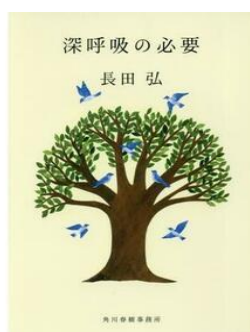
让我们将美好的事物用“美丽”来形容吧
清风传来的气息是美丽的
峡谷流过岩石的小溪是美丽的
午后落在小草的云影是美丽的
远处山丘的静寂是美丽的
闪闪发光的小河岸边是美丽的
街道两边被树木遮掩的城市是美丽的
人们擦肩而过时的“你好”是美丽的
种植着排排花卉的路边是美丽的
家家户户被雨水冲洗过的屋顶是美丽的
晚秋古寺 将粗壮的枝叶尽情伸向天空的
大银杏是美丽的
冬季即将来临的阴雨天
南天那火红的果实是美丽的
“紫式部”的紫色果实也是美丽的
翻着篇章的季节是美丽的
人们渐渐老去的背影是美丽的

那些被称为“新闻”的日子里的断片
能否成为我们的历史
富有色彩的每一天才能证明我们的价值
让我们将美好的事物用“美丽”来形容吧
与小猫玩耍的片刻是美丽的
将棕榈枝烧成灰撒在大地
没有什么是永远的 总有一天要回归自然
所以世界是美丽的



作者：

长田弘，1939 年出生于福岛县，诗人。诗集《需要深呼吸》，《心中的问题》，《这个世界很美丽》等。



1. 加深学习

体会丰富的表达方式，探讨人生。

P14 小说《握手》

目标：

注意描写登场人物行动言行的语句，并思考其意思。

从故事的展开来捕捉人物的形象，深度思考人生。



漢字の読み方（汉字的读法和中译）

あくしゅ 握手 握手	こうえん 公園 公园	せいよう りょうり 西洋 料理 てん 店（西餐店）	しゅうどうし 修道士 修道士	ときかん 時間 时间	さくら はな 桜の花 樱花
ち 散る 掉・落	はざくら 葉桜 夹叶樱	あいだ ま 間 / 間 之间	どうぶつえん 動物園 动物园	やすみ 休み 休息	みせ なか 店の中 店里
き どく 気の毒 可怜	い す 椅子 椅子	た 立つ 立 站起	て を ふ 手を振る 摇手	いどころ 居所 在的地方	し 知らせる 告诉
よ だ 呼び出し 叫出	たっしや 達者 擅长	に ほん ご 日本語 日语	こえ 声をかける 打招呼	よ 寄る 顺便到	つち ふ 土を踏む 踏上土地
だい に じ 第二次 第二次	せ かい たい せん 世界大戦 世界大战	しょうわ 昭和 昭和	はる なつ あき ふゆ 春 夏 秋冬 春夏秋冬	く 暮らし 生活	かれ か の じょ 彼・彼女 他・她
ねん き 年季 岁月的痕迹	こんど 今度 下次	こきょう 故郷 故乡	かえ 帰る 回去	ほんぶ 本部 本部	しゅうどういん 修道院 修道院
はたけ 畑 田地	い 言う 说	みな 皆 大家	あ 会って回る 去见大家	おお 大きな手 大きな手 大手	さ だ 差し出す 伸出
おも 思わず 不由自主	かお 顔 脸	てん し えん 天使園 天使园	こども 子供 孩子	じっかい 十戒 十诫	あたま 頭 头
う 浮かべる 浮现	ちゅうがくさんねん 中学三年 中学三年	こうこう 高校 高中	そつぎょう 卒業 毕业	さんねんはん 三年半 三年半	えんちょう 園長 园长
つと 務める 担任	じどう 児童 儿童	ようごしせつ 養護施設 孤儿院	やっかい 厄介 关照	いく 幾つ 几个	しゅう あつ 集・集まる 集・聚集
かんが だ 考え出す	あさばん 朝晩	べんとう 弁当	つかう 使う	しょくじ 食事	しずか 静か

想出	早晚	盒饭	使用	吃饭	安静
食う/食べ る（吃）	せんせい 先生 老师	えんじ 園児 学生/小朋友	す 好き 喜欢	せんたくば 洗濯場 洗衣房	てつだい 手伝い 帮助
ことわ 断る 回绝	しゅにん 主任 主任	きまえ 気前 大方	つき 付き 带	しき 式 式	むじゃき 無邪気 天真
しろもの 代物（有价 値）的东西	えんぴつ 鉛筆 铅笔	し 知る 知道	おも　だ 思い出す 想起	すこ 少し 少	みがま 身構え 准备
きおく　そこ 記憶の底 记忆深处	しゅうよう 収容 收容	こうけい 光景 光景	ひ　　ぱり　だ 引っ張り出す 拽出	つつ 包む 包	かか 抱える 抱着
つくえこ 机越し 隔着桌子	むか 迎える 迎接	うち　いえ 家/家 家	しんぱい 心配 担心	つよ 強い 强	うで 腕 手腕
いきお 勢い 猛地	ひじ 肘 胳膊肘	つくえ　うえ 机の上 桌上	せいじんでん 聖人伝 名人传记	た 立てる 立着	かお 顔 脸
ひつよう 必要 必要	じつ 実に 实在	おだ 穏やかな 和气	びょうにん 病人 病人	こうがい 郊外 郊外	のうじょう 農場 农场
ごなんぼう 五男坊 排行老五	とうきょう 東京 东京	きんきょう 近況 近况	ねっしん 熱心 热心	かた　はじ 語り始める 开始说	ちゅうもん 注文 点菜
いっぴんりょうり 一品料理 单点（菜）	はこ 運ぶ 端来	まえ　　お 前に置か れる 放在面前	さら 皿 盘子	のぞき　こ 込む 盯着看	りょう　　てのひら 両の　　掌 双掌
す　あ 擦り合わせ 搓手	な 鳴る 响	ほうもんきゃく 訪問客 来客访问	かいけん 会见 会见	さ 避ける 避免	うら 裏 后边
けいしゃ 鶏舎 鸡窝	しょくりょう 食料 粮食	つく 作る 做	せい　だ 精を出す 热心去做	よご 汚れる 脏	いた　は 板を張る 帖木板
かた 固い	ころ 頃	ひだり　みぎ 左/右	ひと　さ　　ゆび 人差し指	の 伸びる	ゆびさき　　つめ 指尖の爪

硬	时候	左/右	食指	伸	指尖的指甲
つぶ 潰れる	はな 鼻くそ	まる 丸める	せいじょう 正 常	は 生える	きみょう 奇妙
弄碎	鼻屎	団	正常	长出	奇妙
なが 流れる	はじ 始まる	よこはま 横浜	しゅっぱん 出 帆	さいご 最後	こうかんせん 交換船
流	开始	横浜	出航	最后	交换船
つごう 都合	ちゅうし 中止	つ 連れる	やま なか 山の中	お 終わる	あ ち 荒地地
情况	中止	带着	山里	结束	荒地
かいこん 開墾	ろうどう 労働	ようび 曜日	かいりつ 戒律	きん 禁じる	だいひょう 代 表
开辟	劳动	星期	戒律	禁止	代表
かんとくかん 監督官	やす 休ませる	う あ 埋め合わせ	もう い 申し入れる	ていこく 帝国	どにち 土日
工头	让 休息	填补	申请	帝国	周六周日
しか 叱り	み 見せしめ	おも き 思い切り	き つ 気を付ける	こころ そこ 心 の底	にく 憎む
骂人	示众	用尽全力	小心	心里	憎恨
ばくはつ 爆発	やさ 優しい	せんしょうこく 戦 勝 国	はくじん 白人	はいせんこく 敗戦国	どろ 泥だらけ
爆发	温柔	战胜国	白人	战败国	都是泥
やさ 野菜	とり そだ 鶏を育てる	う 売る	しんせつ 親切	もと と 元を取る	た き 立ち消える
蔬菜	养鸡	卖	亲切	捞回本	消失
しる み 汁の実	くち はい 口に入る	なが 眺める	うたが 疑 う	ばち あ 罰が当たる	おも はじ 思 い 始める
汤里的菜	入口	看着	怀疑	受到惩罚	开始想
たい 対する	こくさいほう 国際法	む し 無視	いた 至る	もう わけ 申し訳	お 置く
对	国际法	忽视	至于	抱歉	放
ゆび さき 指の先	てんじょう 天 井	さ 指す	こま 細かい	ふる 震える	き 聞く
指尖	天棚	指	细微	颤抖	听
か 代わり	くせ 癖	そうりだいじん 総理大臣	ごうまん 傲慢	しん 信じる	ひとり 一人

代替	毛病，习惯	总理大臣	傲慢	信	一个人
にんげん 人間	おやゆび 親指	さいこう 最高	くびかし 首を傾げる	しょくよく 食欲	おつぶす 押し潰す
人类	拇指	最好	歪头	食欲	压扁
くうき 空気	しう 仕打ち	あやま 謝る	いちど 一度	りょうて 両手	こうさ 交差
空气	报复	道歉	一次	两手	交叉
うつつ 打ち付ける	すがた 姿	のうり 脳裏	きけんしんごう 危険信号	うご 動き	わるこ 悪い子
敲	様子	脑里	危険信号	动作	坏孩子
つぎ 次	ひらてう 平手打ち	と 飛ぶ	いた 痛い	かな 悲しい	ひょうじょう 表情
下次	耳光	飞来	痛	难过	表情
おたた 折り畳む	むだん 無断	ぬだ 抜け出す	しんじゅく 新宿	よくあさ 翌朝	うえの 上野
折起	没有许可	跑出	新宿	第二天早上	上野
つく 着く	ゆうらくちょう 有楽町	あさくさ 浅草	えいが 映画	じつえん 実演	みまわ 見て回る
到达	有乐町	浅草	电影	演出	到处去看
やこうれっしゃ 夜行列車	まつ 待つ	あさ 朝	かならず 必ず	もど 戻る	しんばい 心配
夜车	等待	早上	必须	回来	担心
さが 捜す	かお 書き置き	かべ 壁	はつ 貼り付ける	いっかげつかん 一月間	けんぶつ 見物
寻找	留条	墙壁	贴在	一个月	参观
ひよう 費用	ひねだ 捻り出す	はくじょう 白状	わす 忘れる	おし 教える	じゅんび 準備
费用	攒出来	坦白	忘记	告诉	准备
じゅんけ 純毛	くつした 靴下	したぎ 下着	き 着る	えきまえ 駅前	やみいち 闇市
纯毛	袜子	内衣	穿	站前	黑市
う 売り払う	わはね 羽/羽	もちだし 持ち出し	やとりや 焼き鳥屋	あらた 改める	ちが 違う
卖掉	只/羽毛	拿出	烧烤店	再次/正式	不同
わらう 笑う	めあ 召し上がる	つか 疲れる	おおぐ 大食らい	しごと 仕事	ことば 言葉

笑	吃	疲労	大吃，饭桶	工作	语言
こんなん 困難	ぶんかつ 分割	もんだい 問題	わ 割る	じみち 地道	かた 片づける
困难	分期	问题	分开	认真/踏实	解决/收拾
じょうだん 冗談	ゆいごん 遺言	たず 訪ねる	ある 歩く	たの 楽しい	おも 重い
笑话	遗言	访问	走	快乐	沉重
びょうき 病氣	わかれ 別れる	ぎしき 儀式	けっきょく 結局	へいぼん 平凡	しつもん 質問
疾病	分別	仪式	结果	平凡	提问
き 決まる	よなか 世の中	いちにんまえ 一人前	はたら 働く	せいもん 正門	すこ 捨て子
解决	社会上	一人独立	工作	正门	弃婴
ふ 増える	ようき 陽氣	はっけん 発見	なが 長く	かぜひ 風邪を引く	ははおや 母親
増加	天气暖和	发现	长	感冒	母亲
さいご 最後	あいじょう 愛情	えら 選ぶ	せいめい 姓名	ちえ 知恵	しば 絞る
最后	爱	选择	姓名	智慧	绞尽脑汁
しえい 市営	うんてんしゅ 運転手	とお 通る	ろせん 路線	のあ 乗り合わせ	あいず 合図
市営	司机	通过	路线	一起坐	手势
うでまえ 腕前	と 飛ばす	と 止める	ていりゅうじょ 停留所	けっこん 結婚	う 生まれる
技术	快开	停止	车站	结婚	生下
ふうふ 夫婦	べっきょ 別居	りこん 離婚	おもに 重荷	あず 預ける	ながさか 長い坂
夫妇	分居	离婚	重负	放在	长的坡路
にだい 二代	はい 入る	かべ 壁	とけい 時計	みあ 見上げる	さしゃ 汽車
两代	进入	墙壁	挂钟，手表	仰望	火车
なかゆび 中指	かか 掲げる	こううん 幸運	いの 祈る	いみ 意味	ちゅうおうかいさつ 中央改札
中指	举起	幸运	祈祷	意思	中央出口
おもき 思い切る	し 死ぬ	こわ 怖い	あか 赤い	あたま 頭	てんごく 天国

鼓起勇气	死	恐怖	红色	头	天国
行く 去	ほんとう 本当 真的	さび 寂しい 寂寞	かみさま 神様 神	こた 答える 回答	たりる 足りる 足够
じょうげ 上下 上下	はげ 激しい 激烈	ふ 振る 摇	お 終わる 结束	いっしゅうき 一周忌 一周周年纪念	しゅよう 腫瘍 肿瘤
す 巢 窝	そうしき 葬式 葬礼				

课文

《握手》

卢劳伊修道士准时来到上野公园里的那家老西餐店。樱花已经开过，离完全长出叶子还差不远时间。加上今天动物园休息，店里客人少得可怜。我从椅子站起来挥了挥手告诉他在这儿，卢劳伊修道士一边用流利的日语说：“特意让你跑一趟，抱歉！”一边向这边走来。

卢劳伊修道士是在第二次大战勃发之前的昭和十五年（1940 年）春天踏上这片土地的。因为一直生活在日本，他的日语里可以感到岁月流下的痕迹。

“我决定回祖国了。以后打算在加拿大修道院的本部种种地悠闲自在地度过晚年。为了能和大家说声再见，像今天这样挨个约熟人见面。好久不见了。”卢劳伊修道士伸过他的大手。看到那双手让我不由自主地皱了皱眉，脑海里浮现出在“光丘天使园”孩子之间流传的“天使十戒”。

我从中学三年的秋天到高中毕业的三年半时间都在卢劳伊修道士担任园长的孤儿院度过。那里有几条“戒律”，因为是孩子们想出来的，所以也没什么大不了的。内容天真可爱，比如：“上午不能动盒饭（如果被发现第二天就领不到盒饭）”“早餐和晚餐不能默默地吃（因为卢劳伊老师喜欢看园里的孩子热热闹闹地吃饭）”“洗衣房需要我们去帮忙的时候不要回绝！（如果好好干活，洗衣房的主任麦克老师很大方，一定会奖赏我们面包加黄油。）”等。

我想起其中有一条是：“不要随便和卢劳伊老师握手。（被他握过的手疼得握不住铅笔）”。这让我有些紧张，也是因为想起了“天使十戒”，唤醒了我内心深处的记忆，被收容在天使园时的那些情景。

当年我抱着包袱皮走进园长的办公室，卢劳伊修道士隔着书桌向我伸出手表示欢迎：“从今天起，这就是你的家。别担心，一切都有我呢。”不过他的腕力太大，还紧握着我的手上下摇动，让我的臂肘碰到摆在书桌上的《圣人传》，好痛！

但是现在却没有必要皱眉了。因为他的手握得很轻，像握一个病人的手。然后，这个“魁北克”（郊外农场）出身，在家排行老五的修道士开始热心地和在东京再会的学生谈起话来，都是关于过去孤儿院收养的孩子们的近况。过了一会，点的那道“素煎蛋卷”被端来放在卢劳伊修道士的面前。

“喔，好香啊”卢劳伊修道士盯着盘里的蛋卷一边说，一边合掌祈祷。但他的手掌不再有过去的摩擦声。作为一院之长，卢劳伊修道士经常逃避会客和开招待会，也不喜欢坐办公室。多半的时间去孤儿院后边的农田和鸡窝热心地为孩子们种菜取蛋。所以，他的手总是脏兮兮的，手掌硬的仿佛贴了一层橡木似的。所以当他将手掌合并总会发出摩擦的声音。

“老师左手食指的形状还是那么特别呀”我说。他拿叉子的左手食指是翘起来的，手指甲变形，像是有块卷起的鼻屎贴在上边。好像不会长出正常的指甲了。当时在孤儿院流传着一个关于奇怪指甲的故事。他来日两年后战争就开始了。本来准备乘坐从横滨启航的最后那班交换船回加拿大，但是由于日方出现意外，交换船的出发被取消了。随后他们被带到丹泽（神奈川的北西部），直到停战都在山里开辟荒地，种植橘子和“足柄茶”。

这还算好，但是基督教徒的戒律规定礼拜天不能劳动，卢劳伊修道士作为代表去和监工交涉：“请允许我们礼拜天休息，我们会在其他时间将要干的活补上。”监工愤怒地吼道：“大日本帝国的周历上只有礼拜一，礼拜二，礼拜三，礼拜四，礼拜五，没有什么礼拜六，礼拜天”。为了示众，他还用木槌狠狠地砸在修道士的手指上。因此大家议论，卢劳伊老师虽然人很好，但他肯定打心眼里记恨日本人。他的愤怒随时都可能爆发……但是卢劳伊老师始终都是慈善的。而且作为战胜国家的白种人，为了战败国家的孩子在田里种菜养鸡，弄得满身是泥也不在乎。这是为什么呢？

虽然有谣言怀疑他“对孩子这么好，一定是准备把他们养胖以后卖给美国的马

戏团捞回老本。”但这种谣言很快就消失了。因为大家看到他种的菜，养的鸡变成一道道菜吃到孩子们的嘴里，而他又是那么高兴地看着我们吃饭。大家开始感到如果继续怀疑他，一定会遭报应的。

“日本人对不起老师，做了很多坏事。无视国际法，取消交换船，还用木槌碎了您的指头，怎么说呢，真抱歉！”我说。

卢劳伊修道士把餐刀放在盘子上，然后将右手的食指竖起，指着房顶的指尖在微微颤抖。我又想起他有竖起右手食指的习惯，这个动作一般是代替他说“要听话”或者“不行”。

“说话可不能像个国家总理啊。还有，你不能代表日本人发表意见，那太傲慢了。再说不要相信日本人，加拿大人，美国人有何区别。大家都是人类，仅此而已。”

“老师我明白了”我竖起右手的大拇指说。实际这也是他的习惯。我记得修道士想说“明白了”“好”“真了不起”的时候总是竖起大拇指。

“这个蛋卷真好吃”卢劳伊修道士又竖起右手的大拇指说。但是我却在心里不解地打了个问号。因为他虽然说好吃，但明显没有食欲。那个素煎蛋卷大得好像一个被压扁的橄榄球。如果给它打上气，马上可以拿到操场去玩的大小。修道士只是在动刀叉，并没有把蛋卷放到嘴里。

“还有我想问你，以前我打过你吗？如果对你做过严厉惩罚的话，请原谅。”

“好像打过我一次”我回答。我想起卢劳伊修道士将两手的食指交叉，打叉“×”时的样子。这个手势是危险信号，往往代表他发火时的“你是个坏孩子”。然后耳光就会飞过来。他的手很重很痛。

“还是打过你”卢劳伊修道士的表情悲伤，在折餐巾。好像不想再吃了。

“不过，我们做了应该被打的坏事啊。记得高二时的圣诞节，我们几个人擅自跑出天使园去了东京。”第二天早上到了上野，然后去了有乐町和浅草，又看电影，又看戏，晚上才乘夜车赶回仙台。等着我们的就是卢劳伊修道士的耳光，虽然出走之前我们把留言贴在园长办公室的墙上：“后天早上一定回来，请不要担心，也不要找”。

“卢劳伊老师一个月都不和我们讲话，这个惩罚实际比挨几个耳光更痛苦。”

“原来如此。那时你们去东京的费用是怎么攒的”他问。

“不是当时都坦白了吗”我回答。

“啊，我忘了。再告诉我一遍好吗”

“我们整整准备了 3 个月。把您给我们的纯毛袜和连体内衣攒下来不穿，然后拿到站前的黑市去卖，还从鸡窝抓了 5, 6 只鸡卖给了烧烤店。”

卢劳伊修道士又把双手的食指交叉在一起敲了好几下。但是并不像当时那样发怒，反而笑了起来。我担心地问：“老师您哪儿不舒服吗？饭也没动。”

“我有点累，要回仙台的修道院休息休息。等回加拿大的时候，一定恢复到以前的这个大饭桶。”

“但愿那样！”

“你工作怎么样？”

“还可以”

“那就好”卢劳伊修道士竖起右手的大拇指说。然后又加了一句：“如果在工作上遇到不顺心的事，我送你一句话。（将困难分期解决）不要急，把问题仔细分析一下，然后踏踏实实地去解决。别忘了我的这些话。”

我不敢相信，难道这次相见是为了听他的遗言吗！怪不得刚才握手时那么奇怪。这次握手是那么和平，卢劳伊修道士的手让人觉得握起来像个病人似的。前任园长的他莫非患了病，为了和这个世界告别才拖着病人的身体，到处访问昔日孤儿院的毕业生吗。

“您在日本生活，最高兴的事是什么？”我终究还是问了一个极其普通的问题。实际我是想说：“老师您的病很重吧！这是您和我们告别的仪式，对吗？”但是这些话怎么也说不出口。

“最高兴的当然是像这样和天使园的孩子见面了。看到你们进入社会，努力工作是我无限的光荣。对了你还记得上川吗？就是那个上川一雄。”

当然记得。有一年春天，一个男婴被扔在天使园的正门前边。弃婴在春天是最多的。选择春天是因为天气暖和，即使晚些被发现也不会感冒。可能这是作为母亲最后的母爱吧。还有，这些弃婴多半没有名字。孤儿院里的中学生和高中生绞尽脑汁为他们起名。所以，我是不会忘记的。

“上川现在是市营公共汽车的司机。而且他开的线路正好路过天使园。我每个月有1,2次坐他开的汽车，那时可逗了。看到我上车，他就向我打手势，像这样”。卢劳伊修道士竖起右手的大拇指说。

“他在笑话我的老毛病。还想让我见识一下他的开车技术，将汽车开全速，最后在天使园的正门前停车，而不是汽车站停车。这个上川司机不怎么样，但他的这个举动让我满心欢喜。”

“那您最伤心的是什么呢？”

“在天使园长大的孩子进入社会，步入婚姻，有了孩子。但是几年后夫妻之间发生矛盾，分居离婚。他们的孩子被视为沉重的包袱，最后天使园长大的孩子牵着自己孩子的手又来到天使园，看到他们一步步走上坡路，将孩子寄托给孤儿院，父子两代都要在这里度过时我很心痛。”

卢劳伊修道士仰望了一下墙上的挂钟说：“我得坐车回去了”。然后将右手食指搭在中指上摇了摇，这是他的“手语”，意思是：“祝你好运，加油”。

来到上野站的中央检票口，我不由自主地问：“卢劳伊老师不害怕死吗？我怕得要命。”卢劳伊修道士的脸又像过去我们闯祸被他发现时那样有些红。他挠了挠头说：“是去天堂，所以并不怎么害怕。”

“真的有天堂吗？”

“我想还是有信仰的话，活起来更容易些。如果觉得死了以后要去一个荒凉寂寞的世界，还不如期待去热闹的天堂，我这么多年就是为了去天堂而信神的。”

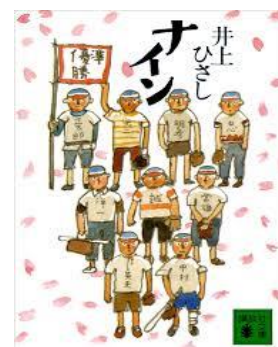
我没有说“是这样”。但为他竖起大拇指，然后握住那双手，握得紧紧的。这

些还不够，我又握着他的手上下摇了几下。“好痛啊”他特意皱了皱眉给我看。

上野公园的樱树完全长出叶子的时候，卢劳伊修道士在仙台的修道院去世了。转眼马上就是一周年纪念日。他到处访问知己的那段时间，正是全身被病魔（癌症）折磨的时期。参加葬礼时我才知道这些，我两手的食指也不由自主地交叉敲打起来。

作者：井上久志

1934 年出生于山形县。小说家，剧作家。著作有《“芬”老师与大盗“卜”》《41 号少年》《与父亲生活》。本作品出典于《nine（9 个人）》。



P28 学而时习之

——出典“论语”

作者：孔子（纪元前 551-479）中国古代思想家。生于鲁国（山东省曲阜市）。其思想以《论语》的形式传颂后代。不仅在中国，还深深影响了日本的学术思想等领域。

学习目标：注意历史背景，体会名言典故的含义。将孔子的思想和自己联系在一起，思考人生的意义。

汉字的读法和中译

ろんご 論語 论语	しそうか 思想家 思想家	こうし 孔子 孔子	でし 弟子 徒弟	げんこう 言行 言行	きろく 記録 记录
じんかく 人格 人格	どうとく 道德 道德	たか 高める 提高	よ 世 世界	おさ 治める 治理	りそう 理想 理想
し 師 老师	ことば 言葉 话语	こうせい 後世 后世	のこ 残す 留给	あ 編む 编织	しょもつ 書物 书籍
ふる 古い 古老	つた 伝える 传达	よ 読む 阅读	つ 継がれる 继承	にんげん 人間 人类	いかた 生き方 活法
すど 鋭い 尖锐	かんさつ 観察 观察	ふか 深い 深奥	しさく 思索 思索	こ 込められる 包含	つぎ 次 下一个
しめ 示す 表示	しょうく 章句 章句	こえだ 声を出す 出声	かんが 考え方 想法	ふ 触れる 接触	ほか 他に 其他
かずおほ 数多く 很多	めいげん 名言 名言	おさ 収める 收纳	じぶん 自分 自己	せいかつ 生活 生活	い 生かす 用于
みずか 自ら 主动	はげ 励ます 鼓励	ともだち 友達 朋友	こうはい 後輩 后辈	おくおく 贈る/送る 赠送	み 見つける 找到

参考资料 1：古语/汉文的读法

置き字

漢文の中には、「助字」と言われる文字の一種があり、語句と語句を接続したり、文末において断定・完了・疑問などの意味を付け加える役目があります。この「助字」の中で、前後に置かれる文字に送り仮名がつくことにより読む必要のなくなる字や、日本語として読むことが難しい字を「置き字」といいます。

「置き字」には「而」「焉」「矣」「於」「于」「乎」「兮」の7種類あります。

上記の文字でも置き字そのものに送り仮名がついている場合は読む必要があるの
で注意しましょう。

「而」 語句と語句を繋ぐ接続の役割を果たします。

直前に読む文字に「テ」や「レドモ」などの送り仮名がつけられます。

順接・逆説どちらでも使用されます。

「乎」「於」「于」 場所・対象・時間・比較・受身を表す前置詞的な働きをします。
どの働きをするかは、場所・対象の語句や比較対処の語句の後に置かれた文字の送
り仮名で判断することができます。例えば、「ヲ」「ニ」であれば場所・対象・状況、
「ヨリモ」であれば比較を示しています。

「矣」「焉」 文末に置かれ、断定・強調などの役割を果たします。

「兮」 韻を踏んだ文（韻文）の中の句中や句末に置かれ、文のリズムを整える役
割を果たします。

子曰く、故きを温ねて新しきを知る、以てて師と為るべしと。
子曰く、温^レ故^ヲ而^{シテ}知^ル新^{シキヲ}、可^{シト}以^テ為^ル師^ト矣[。]
※接続
※強調

例3

過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし
過ぎ^{ギタルハ}猶^ホ不^ルガ及^バ
未^ダ知^ラ生^ヲ。焉^{クンゾ}知^{ラン}死^ヲ。
未^ダ生^ヲを知ら^ズ。焉^{クンゾ}死^ヲを知ら^ズ。
例4

例 3: 「子曰、温故而知新、可以為師矣。」（『論語』孔子）

現代語訳（意識）：先生（孔子）がこうおっしゃった。古い事柄を学び、そこから新しい知識を得ることができる者が人の師となることができると。

再読文字： 返り点を無視して一度読み、その後、返り点に従い二度目を読む文字
のことです。原則として、一度目は〈副詞〉、二度目は〈助動詞 / 動詞〉として
読まれます。二度目を書き下し文にする際は、平仮名で表記します。

再読文字は、「未」「当」「応」「且」「将」「須」「宜」「由」「猶」「盍」の 10 種類
となっています。

「未」読み方：「いまだ・・・ず」意味：「まだ・・・し（てい）ない」など

「将・且」読み方：「まさに・・・んとす」意味：「今まさに・・・しようとする」

「当・応」読み方：「まさに・・・べし」

意味：それぞれ異なります「・・・しなければならない」など（当）

「きっと・・・だろう」など（応）

「須」読み方：「すべからく・・・べし」

意味：「必ず・・・しなければならない」など

「宜」読み方：「よろしく・・・べし」

意味：「・・・するのがよい」など

「猶・由」読み方：「なほ・・・（の / が）ごとし」

意味：「あたかも・・・のようである」など

「盍」読み方：「なんぞ・・・ざる」

意味：「どうして・・・しないのか」など

例 4：「子曰、過猶不及」（『論語』孔子）

現代語訳(意訳)：先生（孔子）はこうおっしゃった。度が過ぎることは、
足りないのと同じくらい良くないことである。

例 4：「未知生、焉知死」（『論語』孔子）

現代語訳(意訳)：まだ生についても理解できていないのに、どうして死について

理解することができるだろうか。

课文：

《论语》记录了远在 2500 年以前诞生于中国的思想家/孔子及其弟子的言行典故。孔子以提高人格和道德来治理世间为目标。其弟子为了将他的名言流芳百世，亲手编写了《论语》这本著作。

《论语》很早传入日本，其对人生意义的解读具有深奥尖锐的观察力，令人至今百读不厌，回味无穷。

请出声朗读以下的四个章句，感受孔子的思想。《论语》还收录了其他众多的名言，你可以找到影响日常生活的名句，还有富有激励，想赠送亲朋好友的金句。

白文 1.

「学而時習之。不亦說乎。有朋自遠方来。不亦樂乎。人不知而不愠。不亦君子乎。」

書き下し文

子曰く、「学びて時に之を習ふ。亦說(よろこ)ばしからずや。朋有り、遠方より来たる。亦樂しからずや。人知らずして愠(うら)みず、亦君子ならずや。」と。孔子はおっしゃいました。

現代語訳(口語訳)

習ったことを機会があるごとに復習し身につけていくことは、なんと喜ばしいことでしょうか。友人が遠方からわざわざ私のために訪ねてきてくれることは、なんと嬉しいことでしょうか。他人から認めてくれなくとも、不満を言わないのは徳があるのではないのでしょうか。

(中译)孔子说：“学习并且按时地去复习，不也很快乐吗？有志同道合的人从远方来，不也很高兴吗？别人不了解我但我不生气，不也是道德上有修养的人吗？”

白文 2.

子曰「温故而知新、可以為師矣」

書き下し文

故（ふる）きを温めて新しきを知る、以て師と為るべし。

現代語訳

古き良きことに習熟し、新しいものの良さがわかる。そんな人は師になる資格がある。

（中译）孔子说：“在温习旧的知识时，能有新的收获，就可以当老师了。”

【解读】 温习旧知识可以得到新知 所谓“前事不忘，后事之师”

白文 3.

『子曰、学而不思則罔、思而不学則殆』（为政）

書き下し文

学びて思わざればすなわち罔（くら）し、思いて学ばざればすなわち殆（あやう）し

現代語訳

学んでも考えなければ、はっきり理解した状態にならない。また、考えるだけで学ぶことがなければ、独断に陥り危険であるということ。

（中译）一味读书而不思考，就会因为不能深刻理解书本的意义而不能合理有效利用书本的知识，甚至会陷入迷茫。而如果一味空想而不去进行实实在在地学习和钻研，则终究是沙上建塔，一无所得。告诫我们只有把学习和思考结合起来，才能学到切实有用的知识，否则就会收效甚微。

白文 4.

『子曰、知之者不如好之者、好之者不如樂之者』

書き下し文

これを知る者はこれを好む者に如（し）かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。

現代語訳

学ぶことにおいて、知っているだけでは好むには及ばない。また、学問を好む者は、学問を楽しむ者に及ばない。

（中译）懂得学习的人不如喜爱学习的人，而喜爱学习的人不如以学习为乐趣的人。孔子认为学习的三种境界为“知之”、“好之”、“乐之”，只有进入以研究学问为人生最大乐趣的最佳境界，才能真正获得心灵上的愉悦和满足。

参考資料 2: 漢文の基礎知識

漢文の種類: 「白文」「訓読文」「書き下し文」の3種類があります。

- 白文・・・漢字だけで書かれた文章
- 訓読文・・・白文に送り仮名や符号をつけ、読みやすくしたもの
- 書き下し文・・・訓読文を漢字と仮名で書き改めたもの



送り仮名: 歴史的仮名遣いのカタカナのことで、訓読文の漢字右下に書きます。

『春眠不覚曉』で言えば、『覺〈エ〉』や『曉〈ヲ〉』のことですね。

書き下し文では平仮名で表記されています。

返り点：書き下し文にする際に、日本語として読みやすくするための記号です。

日本語と中国語では文法が違います。そのまま読んでも日本語が成り立たないので返り点が必要になります。代表的なものは「レ点」「一・二点」「上下点」です。

●レ点・・・下の一字から、すぐ上の一字に返って読む

●一・二点・・・一字から二字に返って読む

●上下点・・・一・二点を挟んで、さらに返って読む。（一・二点より後に返します。）

例 1. 「春眠不覚曉」（『春曉』孟浩然）

現代語訳：春の眠りは心地よく、夜が明けたことも気づかずにいる

例 2. 「寧為鷄口、無為牛後」（『史記』）

現代語訳：「鷄の口になっても、牛の尻になるな」

（訳：大集団でその他大勢として使われるよりも、小集団で長になりなさい）

P39 漢字 1

練習問題①

きょうこく たんけん
峡谷を探検する

ひがた す せいぶつ
干潟に住む生物

もちゅう はがき
喪中の葉書

あいいろ はんもの おく
藍色の反物を贈る

かわ あさせ わた
川の浅瀬を渡る

にしきえ てんらんかい
錦絵の展覧会

ま す じゅんすい ひとみ
真っ直ぐで純粋な瞳

こくおう えっけん
国王に謁見

まゆたま かざ つ
繭玉を飾り付ける

じょうまえ と つ
錠前を取り付ける

かんじゃ ちりょう
患者を治療する

ごいし かたづ
基石を片付ける



練習問題②

こうおつ おとめ ほうかい なだれ やきん かじ りゅうさん いおう
 甲乙 乙女 崩壊 雪崩 冶金 鍛冶 硫酸 硫黄

P40

新習漢字①

ほうしゅう う と
報酬を受け取る

せいきゅう きゃっか
請求が却下される

は ぱ つ はい
どの派閥にも入らない

ばいしょうさん しはら
賠償金を支払う

かんかつがい しごと う け お
管轄外の仕事を受け負う

やさい かかく こうとう
野菜の価格が高騰する

② じゅんぷうまんぱん じょうじょうしゃくりょう しんざんゆうこく かんこつだったい
 順風満帆 情状酌量 深山幽谷 換骨奪胎

③ さ た ろうでん そっこう こうずい
 沙汰 漏電 側溝 洪水

④ ほうちよう と けんま きげん そこ せんしつ おのれ すがた かえり じぶん
 包丁を研ぐ(研磨) 機嫌を損なう(損失) 己の姿を省みる(自分)

おおやけ しせつ りよう こうきよう よ あ け そ め る さいしよ
 公の施設を利用する(公共) 夜が明け初める(最初)

2. 扩大视野

我们要抱有问题意识，向社会展开自己的视野。

目标：抓住文章具体和抽象的关系。

在理解论坛特性的基础上进行阅读，评价文章的构成和理论的展开。

课文：《超越人类编写的故事》

P42 汉字

ものがたり 物語 故事	やせいどうぶつ 野生動物 野生动物	ごかい 誤解 误解	きょうぼう 凶暴 凶暴	かしこ 賢い 聪明	み 見なす 看作
にんげん 人間 人类	おいつ 追い詰める 逼迫	てきたい 敵対 敌对	こうどう 行動 行动	つごう 都合 方便	かいしゃく 解釈 解释
と 取る 采取	ひげき 悲劇 悲剧	けんきゅう 研究 研究	かつこう 格好 正好	せいき 世紀 世纪	なかがろ 中頃 中期
で 出くわす 遇到	たんけんか 探検家 探险家	こうせん 好戦 好斗	にそく 二足 两脚	たちあがり 立ち上がり 站立	こうご 交互 交替
せんげん 宣言 宣言	おそ 襲われる 被袭击	きょうふ 恐怖 恐怖	じゅう 銃 枪	ひがね 引き金 扳机	うちころ 撃ち殺す 打死
えいが 映画 电影	せいさく 製作 制作	せかい 世界 世界	にんき 人気 受欢迎	かいぶつ 怪物 怪物	おそ 恐ろしい 恐怖
む 群れ 成群	かんさつ 観察 观察	まちが 間違い 错误	ぜんご 前後 前后	せなか 背中 后背	ちゅうしん 中心 中心

すうとう 数頭	こども 子供	よあつ 寄り集まる	であい 出合い	おきる 起きる	あた 辺り
几頭	孩子	聚集	相遇	发生	附近
こばし 小走り	とっしん 突進	じめん 地面	ゆうそう 勇壮	まんてん 満点	はくりよく 迫 力
小跑	冲过来	地面	勇猛	满分	魄力
むり 無理はない	なにごと 何事	わか 別れる	たび 旅	しょくもつ 食 物	さが 探す
难免	什么事	分开	旅行	食物	寻找
まんぶく 満腹	くかえ 繰り返す	てんこう 天候	さゆう 左右	ふ 降る	きかげ 木の陰
吃饱	重复	气候	影响	降	树荫
くさむら 草むら	もぐこ 潜り込む	しゅっぱつ 出 発	よ 呼びかけ	ばしょ 場所	とあ 取り合う
草丛	潜伏	出发	招呼	场所	争夺
ひめい 悲鳴	ひなん 避難	まさき 真っ先	ひなん 非難	せいし 制止	こうか 効果
呼叫	避难	马上	指责	制止	效果
しずかえ 静まり返る	ふまん 不満	みき 幹	さそ 誘い	のぼ 登る	あいて 相手
静悄悄	不满	树干	引导	爬	对方
ま 負ける	しめ 示す	じこしゅちょう 自己主 張	いみ 意味	きょり 距離	おく 置く
輸	表示	自我主张	意思	距离	放
きもち 気持ち	つたあ 伝え合う	あらわ 表 す	たたか 戦 い	ひさん 悲惨	うんめい 運命
心情	互相传达	表示	战争	悲惨	命运
みつりん 密林	おくひそ 奥に潜む	ひょうてき 標 的	いのちお 命 を落とす	きたい 期待	こた 応える
密林	深潜	目标	丧命	期待	回应
つか 捕まえる	しゃさつ 射殺	がんじょう 頑 丈	おりなか 檻の中	くさり 鎖	へいわ 平和
捕获	枪杀	牢固	笼中	锁链	和平
せいかつ 生活	しょうかい 紹 介	く 暮らす	お 終わり	ちか 近づく	たい 対する
生活	介绍	生活	结束	接近	对

ひろ 広まる 传开	いんしょう 印象 印象	もと 基 基础	な か ま 仲間 伙伴	せいしつ 性質 性质	ことば 言葉 语言
はつめい 発明 发明	たいけん 体験 体验	かた 語る 诉说	ち し き 知識 知识	きょうゆう 共有 共有	じしん 地震 地震
か し 火事 着火	で き ご と 出来事 发生的事	てきせつ 適切 适当	たいしょ 対処 对待	ほうほう 方法 方法	し 知る 知道
まな 学ぶ 学习	しゃかい 社会 社会	ちくせき 蓄積 积蓄	ぎじゆつ 技術 技术	くふう 工夫 技巧	ひやくてき 飛躍的 飞跃性
はってん 発展 发展	みち ひら 道を開く 开拓	いっぽう 一方 另外	きゃくしよく 脚 色 改编	こちょう 誇張 夸张	ちから 力 力量
じっさい 実際 实际	さいしょ 最初 最初	じょうしき 常識 常识	もと 基づく 为基础	なにげ 何気ない 无意的	こうい 行為 行为
かぎ 鍵 关键	まわ 周り 周围	きら 嫌われる 被讨厌	は な あ 話し合い 商议	と 解く 解开	あいだがら 間 柄 关系
おさ 抑える 抑制	ぶん か 文化 文化	ちが 違う 不同	みんぞく 民族 民族	しゅうふく 修復 修复	ひと ある 独り歩き 独步行走
い し き 意識 意识	ぞうふく 増幅 扩大	ちょうさ 調査 调查	ふ い 踏み入れる 踏入	ふんそう 紛争 纷争	た 絶えず 源源不绝
はだ 肌 肌肤	かん 感じる 感到	き かい 機会 机会	なんど 何度 几次	かくち 各地 各地	あらそ 争 い 争议
しょうとつ 衝 突 冲突	あく わる 悪/悪い 恶/坏	けいしょう 継 承 继承	いだ つづ 抱き続ける 一直抱有	はんたいがわ 反対側 对方	しん う 真に受ける 当真
なが 眺める 眺望	もり 森 森林	とお 通して 通过	しぜん 自然 自然	じしん 自身 自己	み 満ちる 充满

たちば 立場	ひつよう 必要	げんしょう 現象	て 照らす	うたが 疑う	たいど 態度
立場	必要	現象	对照	怀疑	态度
かげ 陰に	とちが 取り違い	はいじょ 排除	めぐ 思い巡らす	たいせつ 大切	こ 超える
背后	误解	排除	左思右想	重要	超越
さき 先に	べつ 別の	もち 用いる	たも 保つ	かち 価値	ゆた 豊かな
先	其他	用于	保持	价值	丰富
からだしくみ 体の仕組み	のうりょく 能力	してん 視点	ちきゅう 地球	いきる 生きる	ひとびと 人々
身体构造	能力	视点	地球	活着	人们
しんじつ 真実	し 知る	むこう 向こう	みし 見知らぬ	うけいれる 受け入れる	とおはな 遠く離れた
真实性	知道	対面	陌生	接受	远离
よろこ 喜び	かな 悲しむ	こっきょう 国境	こ 越える	ゆか 行き交う	じだい 時代
喜悦	悲伤	国境	越过	来往	时代
じぶんかって 自分勝手	ひと 独りよがり	さ 避ける	おか 置き換える	かんが 考える	じゅうよう 重要
任性	自私	避免	换成	考虑	重要
つく 作られる					
创作					

原文：

《超越人类编写的故事》

我们时常会误解野生动物的行动。将狮子和老虎看作凶猛的动物，将狐狸和狸看作狡猾的动物。为什么在我们眼里会是这个形象呢？那是因为人类将他们逼上绝路，迫使它们采取敌对的行动。人们又将这些进行了一番对自己有利的解释。也就是说那些都是人类编写的“故事”。但这些故事却给动物带来了悲剧。

我的研究对象“大猩猩”就是很好的例子。19 世纪中期，在非洲第一次遇到大猩猩的欧洲探险家将它们定义为“凶猛好斗的动物”。只因为看到大猩猩两脚站立，并用两只手掌交替“捶胸”的这个动作，就将它解释为“宣战”。探险家们看到雄猩猩“捶胸”感到要被袭击，就拿起枪支，勾动扳机将它们打死。之后又有一部以大猩猩为题材的电影《KING KONG/金刚》上映，并获得世界票房的好收入。这样人们更将大猩猩凶猛特殊化，将其定性为“好战的怪物”。

我是在 40 年前开始在非洲研究野生大猩猩的。当时认为它们是凶猛可怕的动物。但是进入它们的队伍仔细观察，就知道那些形象完全是人类编造的错误认识。

大猩猩的队伍一般有 10 只左右。其中以带有“银色后背”的雄性首领为主，（注：雄性大猩猩 11 岁以后，后背到腰部的毛变白，是成年和力量的象征。大猩猩的平均寿命为 40 岁。）周围聚集了几只雌性大猩猩和孩子。“捶胸”的行为通常在两个群体相遇时进行。这时各自队伍里的首领出来捶胸，还将身边的草揪下来，一边小跑一边捶打地面。如果在近处观看，是个极其勇猛有力的场面。难免探险家感到恐惧。但这种时候一般很少发生争斗。雄性大猩猩只是相互在不远处瞪着对方，捶了一会儿胸就走开了。



“银色后背”的首领并不只在与其它群体相遇时才捶胸。它们的一天从大家一起踏上旅途寻找食物开始，直到吃饱肚子聚集在一起休息才结束。这样重复的日子有时受到天气的影响。如果下起大雨，就各自钻进树阴或草丛。等雨停了，大家再从树阴出来，银背首领会捶着胸招呼：“我们出发了！”。

此外，雌性大猩猩和孩子们有时会因为获取食物或争夺休息的场所而打架。这时听见有谁在大叫或吵架的声音，银背首领马上捶着胸前来制止争吵的猩猩，它的捶胸是很有效果的。一看见首领捶胸大家就安静了。当然，雌性大猩猩和孩子有时也会捶胸，感到不满时捶胸或敲打树干。孩子之间开始互相追赶时，跑在前边的孩子捶胸招呼后边的伙伴，有时爬到树上挨个捶起胸来。

由此可见，“捶胸”对大猩猩来说，有时是向对方示威的自我炫耀，有时意味着打招呼或表示不满。我们人类找好距离向对方表白或打招呼，同样大猩猩是通过捶胸来表达自己的情感或招呼对方。

但是 19 世纪的探险家却把它误解为战争的宣言，并编写了一个“大猩猩是好战凶猛的动物”的故事。此后让大猩猩背负悲惨的命运。猎手们为了猎取潜伏在密林深处的好战的怪物，众多的大猩猩成了他们抢下的目标，并被杀害。此外，为了满足人们想要目睹怪兽的期待，野生大猩猩被捕捉搬运到欧美的动物园。虽然开始想捕捉的是那些容易调教的小猩猩，但是因为大猩猩挺身而出保护孩子，所以遭到了猎手的枪杀。因为人们认为猩猩的本性是凶猛的，所以即使是小猩猩，被捕后也被关在结实的铁笼并戴上锁链。直到将近 20 世纪末，野生猩猩和平生活在林中的情景被介绍以后，动物园的猩猩才开始群体生活。

对大猩猩捶胸的误解扩大的原因是人们以某个印象为基础编写故事，再将其告诉熟人。这是人类固有的特性。不知何时人类发明了语言，从此开始诉说自己的经历。这样人类共有众多的知识，即使自身没有经历的地震以及火灾，只要听人描述，就能知道适当的处理方法。例如遇到那些没有见过的动物该怎么办，可以从知道的人那里学到对应的方法。语言让人类社会积蓄知识，开发新技术和做进一步的尝试，使人类飞跃地开拓道路。

相反，语言也具有将自己的体验润色和夸张的力量。将实际没看到的事情说成仿佛真的看到一样。此信息再从这个人的嘴里传到另一个人的耳里，一转眼就传播开来。如果最初的故事基于误解的话，也许难以觉察到它的错误。最后被视为社会的常识。

这样基于误解的故事会给人类社会带来悲剧，一些自然的行为被误会，然后变成谣言，从人们的口中一传百传。相传期间它被夸张，成为旁人厌恶的对象。此外，如果用相同的言语交流，彼此的关系可以解除误会的话，也许能抑制发展为不可收拾的悲剧。但是在语言和文化不同的民族之间，误解不但没有得到修复，它以故事的形式流传，让敌对意识更加严重。

我为了调查大猩猩，踏入卢旺达和刚果共和国等地，这些地方纷争不断，让我屡次亲身感到战争的气氛。世界各地至今依然持续着战争和冲突，这是因为把对方作为邪恶的存在，编写对自己有利的“故事”，让毫无止境的仇恨之心代代相传。双方都把那个故事当作真理，而不能站在对方的立场客观地看待自己。

通过调查生活在非洲森林的大猩猩，我了解到人类对自然和动物以及人类本身都有很多误解。如果想解除这些误解就需要站在对方的立场，思考每个行动带有什么意义。还需要把听来的“故事”和实际自己面对的现象进行对照，采取怀疑常识的态度。仔细思考在以“故事”形成的常识背后是否存在被蹂躏的生物或人群，是否存在因误解意思而被排除的事物。

捶胸是战争宣言的“故事”，这个误会被解开以后，对我来说眼前展开一个具有新价值的丰富的世界。了解到“大猩猩使用与人不同的表达方式保护和平”。如果想站在身体构造和能力完全不同的动物的视点考虑问题，就需要十分了解动物生活的大自然。同样，为了理解生活在地球上的人类编写的故事真相，就需要十分了解人类生活中的文化背景和社会背景。

编写故事和传达能力都给拥有语言的人类带来能与伙伴交流的感情世界。因此，人们即使遇到陌生人也能很快地接纳对方，还可以一起分享发生在遥远国度的新闻带来的喜怒哀乐。现代人虽然生活在多文化和各种社会背景中，但已进入可以越过国境进行交流的时代。因此我们更应该避免对待事物的自私的解释，也要怀疑自己的常识，重要的是应具有一个站在对方立场思考问题的视点。超越编写的“故事”，去探索其中的真理。这些才是为了与新世界相识的关键。

作者：山极寿一（1951-）出生于东京都。人类/灵长类学家。著作有《与野生大猩猩的重逢》《家庭进化论》《暴力从何而来》《大猩猩》《丛林导师》等。此文为初中教材所写。

P60 漢字 2

練習問題①

とな い ぼうしょ さつえい おこな
都内の某所で撮影が行われる。

せんざい あわだ
洗剤がよく泡立つ。

ともだち しんぼく ふか
友達と親睦を深める。

どうりょう ちゅうしょく と
同僚と昼食を取る。

ぞうさん ゆか ふ
雑巾で床を拭く。

すみ にお け こうか
炭には臭いを消す効果がある。

練習問題②

そうなん すいそう こんだん かいこん かんてつ てっさよ けんやく ぼうけん はくちゅう はくらい
遭難、水槽 懇談、開墾 貫徹、撤去 儉約、冒険 伯仲 舶来

練習問題③

たんてい そうりょ もほう しゅんびん
探偵、僧侶、模倣、俊敏

練習問題④

ほったん はつげん そうけ そうは じゅみょう めいれい じっけい きょうだい こくだか ほうせき
発端、発言 宗家、宗派 寿命、命令 実兄、兄弟 石高、宝石

3. 与语言同在

体验表达的乐趣，了解深奥的语言世界。

课文：《俳句的可能性》

目标：加深理解俳句的特征

注意内容和表达方式，对俳句进行评价并加深解读。

作者：宇多喜代子，1935年山口县出身。俳句作家。作品有俳句集《夏日》《夏月集》《象》，讲义录《女性俳句诗人的系谱》，散文《名句十二月》等。本文为初三教科书而写。

资料：

“俳诗”是日本文化，和歌的一种。由五七五音节的三句，共十七个音节构成它是由“连歌”的开头部分独立出来的。俳句要求诗中一定要用一个能表现季节感的词，这个词叫作“季语”。江户时代著名的俳人（作俳句的诗人）有松尾芭蕉、与谢芜村、小林一茶等人。明治时代的俳人兼歌人（作三十一音节短歌的诗人）有正冈子规，使俳句成为一种定型的短诗，促进了俳句的普及。

课文：

《俳诗的可能性》

风凉爽吹来 让哪个孩子都是 笑容满面

这句诗里的“哪个孩子”是谁？“风清爽吹来”的地点又在哪里？这句诗是写现在？还是记录了过去？时间是上午还是下午？对这些都没有任何说明。我们只能从中推测季节是夏天，有好几个孩子，风平等的吹到他们脸上。

俳诗与散文和新闻报道等不同的是它的鉴赏效果。能够将省略的部分让读者

来自由解释和补充。读过这句诗的人，有的把“哪个孩子”当作自己来读，有的人可能回忆起在校园树荫下同学们一起乘凉时的情景，有的人可能回想起小时候在海边玩耍的记忆。

促使这些想象的是将一个个词语连接为一体的“五/七/五”（定型）和“凉爽”表示夏季的（季语）。俳诗省略了详细的说明，使用支撑一句诗的词语“季语”，以“五/七/五”的定型来表达，这些是它的基本规则。这个规则被称为“有季定型”，它是支撑俳诗韵文的重要存在。我们可以阅读《岁时记》来了解季语，如“凉爽”的季语是“夏季”。

询问来访者 现在下雪有多深 一次又一次 （作：正冈子规）

雪下得很大，重病在身的子规躺在床上，从拉门的门缝看外边的雪景。雪积了有多厚？自己不能出去踩在上边试一试，只好一次又一次地询问出入病房的人。有的人说雪已经没过了脚脖子，有的人讲雪已经超过了膝盖。听到这些子规想象着庭院以及道路还有公园的雪景。

即使想详细说明降雪的情况，因为有“定型”的限制，无法描写它的全部。为了弥补这些，有效的方法是使用“切字”（尾语）。例如在上首诗中将表示无法推测的“かな”放在句尾，还有子规诗中的“けり”也起了这个作用。

下面再来介绍一首不用“切字”的俳诗。

当手触到跳箱的一瞬间 感到冬天已来临 （作者：友冈子乡）

这首俳诗仿佛照相机的镜头一样，将在初冬的体育馆练习跳箱的一瞬间拍摄下来。当手触到跳箱腾空跃起的一瞬间，感到空中清澈的空气，联想到冬天已经来临。即使“当手触到跳箱的一瞬间”与“感到冬天已来临”并没有直接的关系。但作者的感性使这两个条件合为一体，成功地将初冬清晰的季节感生动地表达出来。

俳诗能将“一瞬间”和漫长的“冬天”连为一体，使用极少的字数来表达庞大的信息。可以说它具有无限的可能性。

蒲公英的种子撑开绒毛 小伞结队飞上天 （作者：加藤楸屯）

请出声朗读一下这首俳诗。读到“小伞”的时候我们会自然联想起“圆形”，

而蒲公英的绒毛轻盈地飞上天被“圆形小伞”形容得淋漓尽致。出声朗读可以让语言更加生动，这是韵文的特点之一。以下俳诗更是发挥了这个特点。

用手将树丛分开再分开 青山无止境

（作者：种田山头火）

“山火头”被称作放浪诗人。他一个人出发在全国徒步旅行，诗中重复“分开再分开”的节奏感和在山道默默前进的步伐非常一致，让读者觉得有共同前行的感受。而且这句诗打破了“五七五”的定型，而且没有“季语”。这种自由音律的俳诗被称为“自由律俳诗”，没有季语的俳诗被称为“无季俳诗”。

也许大家觉得俳诗的规则很多也很难，但是在这篇课文里出现的俳诗没有一首是陌生的。“凉爽的风，雪，跳箱，蒲公英，徒步旅行”等都是我们非常熟悉的。所以只要我们关心一件事，即使是教室窗外的云朵，或者风中摇动的草木，路边的小石头和虫子，朋友和家人都可以成为俳诗的主人公。

写俳诗的时候不要追求怎样才能写好，自己看到的事物都可以向它们问候一声：“你好”，这种态度就是创作俳诗的源泉。我们遇到喜爱的风景会拿起照相机把它拍下来，写俳诗和照相一样也要保持轻松自然的态度。写好的俳诗是作者鲜明表达出的瞬间感受，也是作者独一无二的宝贵回忆。



漢字の読み方

はいく 俳句 俳詩	かのうせい 可能性 可能性	すず 涼しい 凉爽	ばしょ 場所 場所	きせつ 季節 季节	ふくすう 複数 复数
わ へだ 分け隔て 区分	さんぶん 散文 散文	ほうどう き じ 報道記事 报道新闻	しょうりやく 省 略 省略	かいしゃく 解 釈 解释	おぎな う 補 う 补充
かんしょう 鑑 賞 欣赏	こうてい 校庭 校园	こかげ 木陰 树荫	ようじ 幼児 幼儿	うみべ 海辺 海边	たいけん 体験 体验
そうぞう 想像 想象	こ こ べつべつ 個々別々 个别	ていけい 定型 定型	き ご 季語 季语	はしら・ちゅう 柱 / 柱 柱子/主干	きほんてき 基本的 基本的
ゆう き・む き 有季/無季 有/无季节	いんぶん 韻文 韵文	さい じ き 歳時記 岁时记	めぐ 繰れば 翻	たず 尋ねる 问	はげ 激しい 激烈
わず 僅かな 仅仅	しょうじ 障子 拉门	つ 積もる 积	たし 確かめる 确认	びょうしつ 病 室 病房	せきせつ 積雪 积雪
いくど 幾度 几次	ひざ 膝 膝盖	う 埋まる 埋没	せいやく 制約 制约	い っ つか 言い尽くす 说尽	くふう 工夫 功夫
ぼうとう 冒頭 开头	だんねん 断念 放弃	つ て 突き手 手触到	いっしゅん 一 瞬 一瞬间	そら・ちゅう 宙 / 宙 空中	と ばこ 跳び箱 跳箱
とら 捉える 捕捉	くうちゅう 空 中 空中	す 澄む 清澈	たい き 大気 大气	む かんけい 無関係 没关系	せいこう 成功 成功
じすう 字数 字数	ひょうげん 表 現 表达	ひ 秘める 隐藏秘密	わた け 絮毛 毛絮	くちびる 唇 嘴唇	ひび 響く 回应
かる 軽やか 轻松	とくちょう 特 徴 特征	ほうろう 放浪 流浪	あんぎゃ 行脚 步行	さんどう 山道 山道	ほちょう 歩調 步伐

かさ 重なる 重合	どくしゃ 読者 读者	さそこ 誘い込む 邀请	おんりつ 音律 音律	やくそく 約束 约定	とくべつ 特別 特別
みじか 身近 身边	かんしん 関心 关心	まど 窓 窗户	くさき 草木 草木	みちばた 道端 路边	しゅやく 主役 主角
めと 目を留める 视线停留	あいさつ 挨拶 打招呼	つた 伝わる 传到	と 撮る 拍摄	きがる 気軽 轻松	かんかく 感覚 感觉
あざ 鮮やか 鲜明	うつだ 映し出す 照出	きろく 記録 记录			

4. 在各种情况下

想象在各种情况下生活的人和他们的形象，加深理解。

诗：《你好——原爆照片中的你》

目标：

注意比喻和象征性的表达方式，通过文脉理解其意。

评价诗中所用的表达方式和其效果，与现代社会的状况相比较，来加深理解。

作者：石垣凛

1920年—2004年出生于东京都，诗人。著作有诗集《我面前有锅和灶台和火》《门牌等》《履历》《温柔的话》，散文《幽默的锁国》《伸手烤火》等。本文出典于《石垣凛诗集》。

原文

あいさつ 挨拶	げんぱく　しゃしん 原爆の写真によせて	中文翻译 《你好——原爆照片中的你》
------------	------------------------	-----------------------

あ、

この焼^やけただれた顔^{かお}は

一九四五年八月六日

その時^{とき}広島^{ひろしま}にいた人

二五万^やの焼けただれのひとつ

すでに此^この世^よにないもの

とはいえ

とも
友よ

む あ たが かお
向き合った互いの顔を

いちどみなお
も一度見直そう

せん か あと
戦火の後もとどめぬ

きょう かお
すこやかな今日の顔を

あさ かお
すがすがしい朝の顔を

かお なか あした ひょうじょう
その顔の中に明日の表情をさがすとき

わたし
私はりつぜんとするのだ

ちきゅう すうひやくこしよじ
地球が原爆を数百個所持して

せい し ふち ある
生と死のきわどい淵を歩くとき

啊、

这张被原子弹炸烂的脸

是一九四五年八月六日

那时那刻在广岛的人

二五万被炸烂的人里的一个

他已经不在这个世上

但是

我的朋友啊

将面对面的脸

再好好看一下

战火过后今日也依旧

和平的这张脸

清新舒畅的早晨的脸

在这张脸上寻找明日的表情时

我栗然了

地球持有几百个颗原子弹

当你走在生死的悬崖上

为何是那么安详

なぜそんなに^{やす}安らかに

あなたは^{うつく}美しいのか

しずかに^{みみ}耳を^す澄ませ

^{なに}何かが近づいてきはしないか

^み見きわめなければならないものは^め目の^{まえ}前に

^わえり分けなければならないものは

^て手の中に^{なか}ある

^{ごぜん}午前八時一五分は

^{まいあさ}毎朝やってくる

一九四五年八月六日の朝

^{いっしゅん}一瞬にして^{25ばんにん}死んだ二十五万人の^{ひと}人すべて

いま在る

あなたの^{ごと}如く、^{わたし}私の^{ごと}如く

やすらかに ^{うつく}美しく ^{ゆだん}油断していた。

为何是那么美丽

请侧耳倾听吧

是否有什么在向我们靠近

在我们眼前有需要看清的东西

在我们手中

有需要选择的东西

午前八点十五分

每天早晨都会来临

一九四五年八月六日的早晨

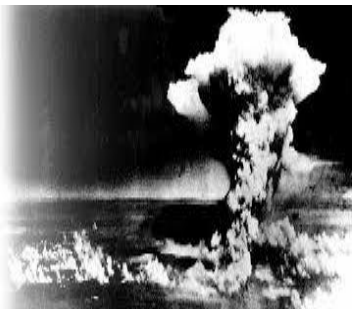
一瞬间死去的二十五万人的每

一个人

都像现在的你

都像现在的我一样

和平美丽的 疏忽 了。



P98 中国名作：《故乡》

目标：

在思考人生意义和社会关系的基础上理解阅读的意义。

以批评的态度去阅读小说，对生活在时代和社会中的人物形象进行思考。

作者：鲁迅（1881-1936）本名周树人。中国作家，被称为中国近代文学之父。著作有小说《阿Q正传》《狂人日记》，杂感《而已集》，散文诗集《野草》，文学史《中国小说史略》等。

日文翻译：

竹内好（1910-1977）长野县出身，中国文学家，评论家。著作有《鲁迅》《国民文学论》等。本文出典于《鲁迅文集》。

原文：

《故乡》

我冒了严寒，回到相隔二千余里，别了二十余年的故乡去。

时候既然是深冬；渐近故乡时，天气又阴晦了，冷风吹进船舱中，呜呜的响，从蓬隙向外一望，苍黄的天底下，远近横着几个萧索的荒村，没有一些活气。我的心禁不住悲凉起来了。阿！这不是我二十年来时时记得的故乡？

我所记得的故乡全不如此。我的故乡好得多了。但要我记起他的美丽，说出他的佳处来，却又没有影像，没有言辞了。仿佛也就如此。于是我自己解释说：故乡本也如此，——虽然没有进步，也未必有如我所感的悲凉，这只是我自己心情的改变罢了，因为我这次回乡，本没有什么好心绪。

我这次是专为了别他而来的。我们多年聚族而居的老屋，已经公同卖给别姓了，交屋的期限，只在本年，所以必须赶在正月初一以前，永别了熟识的老屋，而且远离了熟识的故乡，搬家到我在谋食的异地去。

第二日清早晨我到了我家的门口了。瓦楞上许多枯草的断茎当风抖着，正在说明这老屋难免易主的原因。几房的本家大约已经搬走了，所以很寂静。我到了自家的房外，我的母亲早已迎着出来了，接着便飞出了八岁的侄儿宏儿。

我的母亲很高兴，但也藏着许多凄凉的神情，教我坐下，歇息，喝茶，且不谈搬家的事。宏儿没有见过我，远远的对面站着只是看。

但我们终于谈到搬家的事。我说外间的寓所已经租定了，又买了几件家具，此外须将家里所有的木器卖去，再去增添。母亲也说好，而且行李也略已齐集，木器不便搬运的，也小半卖去了，只是收不起钱来。

“你休息一两天，去拜望亲戚本家一回，我们便可以走了。”母亲说。

“是的。”

“还有闰土，他每到我家来时，总问起你，很想见你一回面。我已经将你到家的大约日期通知他，他也许就要来了。”

这时候，我的脑里忽然闪出一幅神异的图画来：深蓝的天空中挂着一轮金黄的圆月，下面是海边的沙地，都种着一望无际的碧绿的西瓜，其间有一个十一二岁的少年，项带银圈，手捏一柄钢叉，向一匹猹(2)尽力的刺去，那猹却将身一扭，反从他的胯下逃走了。

这少年便是闰土。我认识他时，也不过十多岁，离现在将有三十年了；那时我的父亲还在世，家景也好，我正是一个少爷。那一年，我家是一件大祭祀的值年(3)。这祭祀，说是三十多年才能轮到一回，所以很郑重；正月里供祖像，供品很多，祭器很讲究，拜的人也很多，祭器也很要防偷去。我家只有一个忙月（我们这里给人做工的分三种：整年给一定人家做工的叫长工；按日给人做工的叫短工；自己也种地，只在过年过节以及收租时候来给一定人家做工的称忙月），忙不过来，他便对父亲说，可以叫他的儿子闰土来管祭器的。

我的父亲允许了；我也很高兴，因为我早听到闰土这名字，而且知道他和我仿佛年纪，闰月生的，五行缺土(4)，所以他的父亲叫他闰土。他是能装〔弓京〕捉小鸟雀的。

我于是日日盼望新年，新年到，闰土也就到了。好容易到了年末，有一日，母亲告诉我，闰土来了，我便飞跑的去看。他正在厨房里，紫色的圆脸，头戴一顶小毡帽，颈上套一个明晃晃的银项圈，这可见他的父亲十分爱他，怕他死去，所以在神佛面前许下愿心，用圈子将他套住了。他见人很怕羞，只是不怕我，没有旁人的

时候，便和我说话，于是不到半日，我们便熟识了。

我们那时候不知道谈些什么，只记得闰土很高兴，说是上城之后，见了许多没有见过的东西。

第二日，我便要他捕鸟。他说：

“这不能。须大雪下了才好。我们沙地上，下了雪，我扫出一块空地来，用短棒支起一个大竹匾，撒下秕谷，看鸟雀来吃时，我远远地将缚在棒上的绳子只一拉，那鸟雀就罩在竹匾下了。什么都有：稻鸡，角鸡，鹁鸪，蓝背……”

我于是又很盼望下雪。

闰土又对我说：

“现在太冷，你夏天到我们这里来。我们日里到海边捡贝壳去，红的绿的都有，鬼见怕也有，观音手⁽⁵⁾也有。晚上我和爹管西瓜去，你也去。”

“管贼么？”

“不是。走路的人口渴了摘一个瓜吃，我们这里是不算偷的。要管的是獾猪，刺猬，獾。月亮底下，你听，啦啦的响了，獾在咬瓜了。你便捏了胡叉，轻轻地走去……”

我那时并不知道这所谓獾的是怎么一件东西——便是现在也没有知道——只是无端的觉得状如小狗而很凶猛。

“他不咬人么？”

“有胡叉呢。走到了，看见獾了，你便刺。这畜生很伶俐，倒向你奔来，反从胯下窜了。他的皮毛是油一般的滑……”

我素不知道天下有这许多新鲜事：海边有如许五色的贝壳；西瓜有这样危险的经历，我先前单知道他在水果店里出卖罢了。

“我们沙地里，潮汛要来的时候，就有许多跳鱼儿只是跳，都有青蛙似的两个

脚……”

阿！闰土的心里有无穷无尽的希奇的事，都是我往常的朋友所不知道的。他们不知道一些事，闰土在海边时，他们都和我一样只看见院子里高墙上的四角的天空。

可惜正月过去了，闰土须回家里去，我急得大哭，他也躲到厨房里，哭着不肯出门，但终于被他父亲带走了。他后来还托他的父亲带给我一包贝壳和几支很好看的鸟毛，我也曾送他一两次东西，但从此没有再见面。

现在我的母亲提起了他，我这几时的记忆，忽而全都闪电似的苏生过来，似乎看到了我的美丽的故乡了。我应声说：

“这好极！他，——怎样？……”

“他？……他景况也很不如意……”母亲说着，便向房外看，“这些人又来了。说是买木器，顺手也就随便拿走的，我得去看看。”

母亲站起身，出去了。门外有几个女人的声音。我便招宏儿走近面前，和他闲话：问他可会写字，可愿意出门。

“我们坐火车去么？”

“我们坐火车去。”

“船呢？”

“先坐船，……”

“哈！这模样了！胡子这么长了！”一种尖利的怪声突然大叫起来。

我吃了一吓，赶忙抬起头，却见一个凸颧骨，薄嘴唇，五十岁上下的女人站在我面前，两手搭在髀间，没有系裙，张着两脚，正像一个画图仪器里细脚伶仃的圆规。

我愕然了。

“不认识了么？我还抱过你咧！”

我愈加愕然了。幸而我的母亲也就进来，从旁说：

“他多年出门，统忘却了。你该记得罢，”便向着我说，“这是斜对门的杨二嫂，……开豆腐店的。”

哦，我记住了。我孩子时候，在斜对门的豆腐店里确乎终日坐着一个杨二嫂，人都叫伊“豆腐西施”(6)。但是擦着白粉，颧骨没有这么高，嘴唇也没有这么薄，而且终日坐着，我也从没有见过这圆规式的姿势。那时人说：因为伊，这豆腐店的买卖非常好。但这大约因为年龄的关系，我却并未蒙着一毫感化，所以竟完全忘却了。然而圆规很不平，显出鄙夷的神色，仿佛嗤笑法国人不知道拿破仑(7)，美国人不知道华盛顿(8)似的，冷笑说：

“忘了？这真是贵人眼高……”

“那有这事……我……”我惶恐着，站起来说。

“那么，我对你说。迅哥儿，你阔了，搬动又笨重，你还要什么这些破烂木器，让我拿去罢。我们小户人家，用得着。”

“我并没有阔哩。我须卖了这些，再去……”

“阿呀呀，你放了道台(9)了，还说不阔？你现在有三房姨太太；出门便是八抬的大轿，还说不阔？吓，什么都瞒不过我。”

我知道无话可说了，便闭了口，默默的站着。

“阿呀阿呀，真是愈有钱，便愈是一毫不肯放松，愈是一毫不肯放松，便愈有钱……”圆规一面愤愤的回转身，一面絮絮的说，慢慢向外走，顺便将我母亲的一副手套塞在裤腰里，出去了。

此后又有近处的本家和亲戚来访问我。我一面应酬，偷空便收拾些行李，这样的过了三四天。

一日是天气很冷的午后，我吃过午饭，坐着喝茶，觉得外面有人进来了，便回

头去看。我看时，不由的非常出惊，慌忙站起身，迎着走去。

这来的便是闰土。虽然我一见便知道是闰土，但又不是我这记忆上的闰土了。他身材增加了一倍；先前的紫色的圆脸，已经变作灰黄，而且加上了很深的皱纹；眼睛也像他父亲一样，周围都肿得通红，这我知道，在海边种地的人，终日吹着海风，大抵是这样的。他头上是一顶破毡帽，身上只一件极薄的棉衣，浑身瑟索着；手里提着一个纸包和一支长烟管，那手也不是我所记得的红活圆实的手，却又粗又笨而且开裂，像是松树皮了。

我这时很兴奋，但不知道怎么说才好，只是说：

“阿！闰土哥，——你来了？……”

我接着便有许多话，想要连珠一般涌出：角鸡，跳鱼儿，贝壳，猹，……但又总觉得被什么挡着似的，单在脑里面回旋，吐不出口外去。

他站住了，脸上现出欢喜和凄凉的神情；动着嘴唇，却没有作声。他的态度终于恭敬起来了，分明的叫道：

“老爷！……”

我似乎打了一个寒噤；我就知道，我们之间已经隔了一层可悲的厚障壁了。我也说不出话。

他回过头去说，“水生，给老爷磕头。”便拖出躲在背后的孩子来，这正是一个廿年前的闰土，只是黄瘦些，颈子上没有银圈罢了。“这是第五个孩子，没有见过世面，躲躲闪闪……”

母亲和宏儿下楼来了，他们大约也听到了声音。

“老太太。信是早收到了。我实在喜欢的不得了，知道老爷回来……”闰土说。

“阿，你怎的这样客气起来。你们先前不是哥弟称呼么？还是照旧：迅哥儿。”母亲高兴的说。

“阿呀，老太太真是……这成什么规矩。那时是孩子，不懂事……”闰土说着，

又叫水生上来打拱，那孩子却害羞，紧紧的只贴在他背后。

“他就是水生？第五个？都是生人，怕生也难怪的；还是宏儿和他去走走。”母亲说。

宏儿听得这话，便来招水生，水生却松松爽爽同他一路出去了。母亲叫闰土坐，他迟疑了一回，终于就了坐，将长烟管靠在桌旁，递过纸包来，说：

“冬天没有什么东西了。这一点干青豆倒是自家晒在那里的，请老爷……”

我问问他的景况。他只是摇头。

“非常难。第六个孩子也会帮忙了，却总是吃不够……又不太平……什么地方都要钱，没有规定……收成又坏。种出东西来，挑去卖，总要捐几回钱，折了本；不去卖，又只能烂掉……”

他只是摇头；脸上虽然刻着许多皱纹，却全然不动，仿佛石像一般。他大约只是觉得苦，却又形容不出，沉默了片时，便拿起烟管来默默的吸烟了。

母亲问他，知道他的家里事务忙，明天便得回去；又没有吃过午饭，便叫他自己到厨下炒饭吃去。

他出去了；母亲和我都叹息他的景况：多子，饥荒，苛税，兵，匪，官，绅，都苦得他像一个木偶人了。母亲对我说，凡是不必搬走的东西，尽可以送他，可以听他自己去拣择。

下午，他拣好了几件东西：两条长桌，四个椅子，一副香炉和烛台，一杆抬秤。他又要所有的草灰（我们这里煮饭是烧稻草的，那灰，可以做沙地的肥料），待我们启程的时候，他用船来载去。

夜间，我们又谈些闲天，都是无关紧要的话；第二天早晨，他就领了水生回去了。

又过了九日，是我们启程的日期。闰土早晨便到了，水生没有同来，却只带着一个五岁的女儿管船只。我们终日很忙碌，再没有谈天的工夫。来客也不少，有 k

送行的，有拿东西的，有送行兼拿东西的。待到傍晚我们上船的时候，这老屋里的所有破旧大小粗细东西，已经一扫而空了。

我们的船向前走，两岸的青山在黄昏中，都装成了深黛颜色，连着退向船后梢去。

宏儿和我靠着船窗，同看外面模糊的风景，他忽然问道：

“大伯！我们什么时候回来？”

“回来？你怎么还没有走就想回来了。”

“可是，水生约我到他家玩去咧……”他睁着大的黑眼睛，痴痴的想。

我和母亲也都有些惘然，于是又提起闰土来。母亲说，那豆腐西施的杨二嫂，自从我家收拾行李以来，本是每日必到的，前天伊在灰堆里，掏出十多个碗碟来，议论之后，便定说是闰土埋着的，他可以在运灰的时候，一齐搬回家里去；杨二嫂发见了这件事，自己很以为功，便拿了那狗气杀（这是我们这里养鸡的器具，木盘上面有着栅栏，内盛食料，鸡可以伸进颈子去啄，狗却不能，只能看着气死），飞也似的跑了，亏伊装着这么高的小脚，竟跑得这样快。

老屋离我愈远了；故乡的山水也都渐渐远离了我，但我却并不感到怎样的留恋。我只觉得我四面有看不见的高墙，将我隔成孤身，使我非常气闷；那西瓜地上的银项圈的小英雄的影像，我本来十分清楚，现在却忽地模糊了，又使我非常的悲哀。

母亲和宏儿都睡着了。

我躺着，听船底潺潺的水声，知道我在走我的路。我想：我竟与闰土隔绝到这地步了，但我们的后辈还是一气，宏儿不是正在想念水生么。我希望他们不再像我，又大家隔膜起来……然而我又不愿意他们因为要一气，都如我的辛苦展转而生活，也不愿意他们都如闰土的辛苦麻木而生活，也不愿意都如别人的辛苦恣睢而生活。他们应该有新的生活，为我们所未经生活过的。

我想到希望，忽然害怕起来了。闰土要香炉和烛台的时候，我还暗*乴𦏧 λ・*以为他总是崇拜偶像，什么时候都不忘却。现在我所谓希望，不也是我自己手制的偶像么？只是他的愿望切近，我的愿望茫远罢了。

我在朦胧中，眼前展开一片海边碧绿的沙地来，上面深蓝的天空中挂着一轮金黄的圆月。我想：希望本是无所谓有，无所谓无的。这正如地上的路；其实地上本没有路，走的人多了，也便成了路。

一九二一年一月。

注释

(1)本篇最初发表于一九二一年五月《新青年》第九卷第一号。

(2)獠：作者在一九二九年五月四日致舒新城的信中说：“‘獠’字是我据乡下人所说的声音，生造出来的，读如‘查’。……现在想起来，也许是獯罢。”

(3)大祭祀的值年：封建社会中的大家族，每年都有祭祀祖先的活动，费用从族中“祭产”收入支取，由各房按年轮流主持，轮到的称为“值年”。

(4)五行缺土：旧社会所谓算“八字”的迷信说法。即用天干（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）和地支（子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥）相配，来记一个人出生的年、月、日、时，各得两字，合为“八字”；又认为它们在五行（金、木、水、火、土）中各有所属，如甲乙寅卯属木，丙丁巳午属火等等，如八个字能包括五者，就是五行俱全。“五行缺土”，就是这八个字中没有属土的字，需用土或土作偏旁的字取名等办法来弥补。

(5)鬼见怕和观音手，都是小贝壳的名称。旧时浙江沿海的人把这种小贝壳用线串在一起，戴在孩子的手腕或脚踝上，认为可以“避邪”。这类名称多是根据“避邪”的意思取的。

(6)西施：春秋时越国的美女，后来用以泛称一般美女。

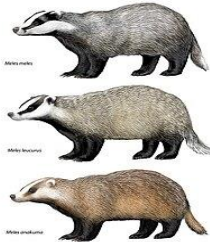
(7)拿破仑（1769—1821）：即拿破仑·波拿巴，法国资产阶级革命时期的军事家、政治家。一七九九年担任共和国执政。一八〇四年建立法兰西第一帝国，自称拿破仑一世。

(8)华盛顿（1732—1799）：即乔治·华盛顿，美国政治家。他曾领导一七七五年至

一七八三年美国反对英国殖民统治的独立战争，胜利后任美国第一任总统。

(9)道台：清朝官职道员的俗称，分总管一个区域行政职务的道员和专掌某一特定职务的道员。前者是省以下、府州以上的行政长官；后者掌管一省特定事务，如督粮道、兵备道等。辛亥革命后，北洋军阀政府也曾沿用此制，改称道尹。

10.「故郷」(こきょう、原題：故郷)は、魯迅の代表作ともいえる短編小説のひとつ。1921年(中華民国10年)5月『新青年』に発表され、のちに魯迅の最初の作品集である『呐喊』(1923年)に収録された。作品に描かれた主人公の生家の没落、故郷からの退去は、魯迅本人の経験がもととなっている。当時の社会に残存する封建的な身分慣習に対する悲痛な慨嘆が込められている。



獾(チャー、chá) アナグマ・猪獾 zhūhuān

鬼見怕別名观音手

日文翻译: <https://m.hujiang.com/jp/p1403/>

《故郷》

魯迅

竹内好 訳

きび さむ 厳しい寒さの中を、に せんり は 二千里の果てから、わか 別れて二十年にもなる故郷へ、わたし
かえ は帰った。

もう まふゆ こう 真冬の候であった。そのうえ故郷へ ちか 近づくにつれて、そらもよう あや 空模様は怪しくなり、

つめ かぜ おと ふね ふ こ とま
冷たい風がヒューヒュー音をたてて、船の中まで吹き込んできた。苦のすきまか
そと なまりいろ そら した むらむら かっさ
ら外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、
あちこちに横たわっていた。おぼ せきりょう かん むね
覚え寂寥の感が胸にこみあげた。

ああ、これがにじゅうねんらい かたとき わす
あ、これが二十年来、片時も忘れることのなかった故郷であろうか。

わたしのおぼ
わたしの覚えている故郷は、まるでこんなふうではなかった。わたしの故郷は、
もっとずっとよかった。その うつく おも う ちょうしょ ことば あらわ
もっとずっとよかった。その美しさを思い浮かべ、その長所を言葉に表そう
とすると、しかし、そのかげ は け ことば うしな
とすると、しかし、その影はかき消され、言葉は失われてしまう。やはりこん
なふうだったかもしれないというき が して くる。そこでわたしは、こう じぶん い
い聞かせた。もともと故郷はこんなふうなのだ——しんぽ
い聞かせた。もともと故郷はこんなふうなのだ——進歩もないかわりに、わたし
かん しんきょう かわ
が感じるような寂寥もありはしない。そう感じるのは、自分の心境が変わった
だけだ。なぜなら、こんど ききょう け たの
ただ。なぜなら、今度の帰郷は決して楽しいものではないのだから。

わか つ なが いちぞく す
今度は、故郷に別れを告げに来たのである。わたしたちが長いこと一族で住ん
ふる いえ いま たにん も もの あ わた きげん
でいた古い家は、今はもう他人の持ち物になってしまった。明け渡しの期限は
ことし きゅうれき しょうがつ す なれ ふる いえ わか
今年いっぱいである。どうしても旧暦の正月の前に、住み慣れた古い家に別れ、
ぶか いまく た いきょう ち ひ
なじみ深い故郷をあとにして、わたしが今暮らしを立てている異郷の地へ引っ
こ
越さねばならない。

あ ひ あさはや おもてもん た や ね いちめん か くさ
明くる日の朝早く、わたしはわが家の表門に立った。屋根には一面に枯れ草
くさ おり かぜ ふる いえ も ぬし か
のやれ莖が、折からの風になびいて、この古い家が持ち主を変えるほかなかった

理由を説き明かし顔である。一緒に住んでいた親戚たちは、もう引っ越してしま
ったあとらしく、ひっそり閑としている。自宅の庭先まで来てみると、母はもう
迎えに出ていた。あとから八歳になる甥の宏児もとび出した。

母は機嫌よかったが、さすがにやるせない表情は隠しきれなかった。わたしを座らせ、休ませ、茶をついでくれなどして、すぐ引っ越しの話はもち出さない。宏児は、わたしとは初対面なので、離れた所に立って、じっとわたしの方を見つめていた。

だが、とうとう引っ越しの話になった。わたしは、あちらの家はもう借りであること、家具も少しは買ったこと、あとは家にある道具類をみんな売り払って、その金で買ったせばよいこと、などを話した。母もそれに賛成した。そして、荷造りもほぼ終わったこと、かさばる道具類は半分ほど処分したが、よい値にならなかったことなどを話した。

「一、二日休んだら、親戚回りをしてね、そのうえでたつとしよう。」と母は言った。「ええ。」

「それから、^{るんとう}閨土ね。あれが、いつも家へ来るたびに、おまえのうわきをしては、しきりに^あ会いたがっていましたよ。おまえが^つ着くおよその^{ひど}日取りは^し知らせておいたから、いまに来るかもしれない。」

この時突然、わたしの脳裏に不思議な画面が繰り広げられた——紺碧の空に
金色の丸い月がかかっている。その下は海辺の砂地で、見渡す限り緑の西瓜が
植わっている。そのまん中に十一、二歳の少年が、銀の首輪をつるし、鉄の刺

また て た
叉を手にして立っている。そして一匹の「チャー」を^め目掛けて、ヤッとはばかり突^つ
く。すると「チャー」は、ひらりと身^みをかわして、彼の^{かれ}またをくぐって逃^にげてし
まう。

この^{しょうねん るんとう}少年が^{るんとう}閩土である。彼と知^{かれ}り合^しった時、わたしもまだ^{じゅうさい}十歳そこそこだっ
た。もう^{さんじゅうねんちか むかし}三十年近い昔のことである。そのころは、父^{ちち}もまだ生きていたし、家^{いえ}
の暮^くらし向^むきも楽^{らく}で、わたしは坊^{ぼっ}ちゃん^ちでいられた。ちょうどその^{とし}年は、わが家^や
が大祭^{たいさい}の当番^{とうばん}にあたっていた。この祭^{まつ}りの当番^{とうばん}というのが、^{さんじゅうなんねん}三十何年^{ねん}めにただ
一回^{いっかい}順番^{じゅんばん}が回^{まわ}ってくるとかで、ごく大^{たい}切^{せつ}な行^{ぎやう}事^じだった。正^{しょう}月^{がつ}に、祖^そ先^{せん}の像^{ぞう}を
祭^{まつ}るのである。さまざ^{そなえもの}まの供^く物^{ぶつ}をさ^{さい}さ^きげ、祭^{さい}器^きもよく吟^{ぎん}味^みするし、参^{さん}詣^{けい}の人^{ひと}も
お^おお多^たかった^きので、祭^{さい}器^きをと^とられぬ^{ばん}よう^{ひつよう}に番^{ばん}をする^{ひつよう}必要^{ひつよう}があ^いった。わたし^{いえ}の家^{いえ}には
「^{まんゆえ}忙^{ひとり}月^{ひとり}」が一人^{ひとり}いるだけである。(わたしの^{きやうり}郷^{やと}里^しでは、雇^{しゅるい}い人^{ねんかん}は三^{さん}種^{しゅ}類^{るい}ある。年^{ねん}間^{かん}
とお^{とお}通^きして決^きまった家^{はたら}で働^{はたら}くのが「^{ちやんねん}長^ひ年^ぎ」、日^{にち}決^きめで働^{はたら}くのが「^{とあくん}短^じ工^{ぶん}」、自^こ分^{ぶん}でも耕^{こう}作^{さく}
するかたわら、^{ねんまつ}年^{ねん}末^{まつ}や^{せつき}節^{ねん}季^ぐや^{あつ}年^{あつ}貢^{あつ}集^{あつ}め^{あつ}の時^{とき}などに、決^きまった家^{いえ}へ来^きて働^{はたら}くのが
「^{まんゆえ}忙^よ月^{ひとり}」と呼^よばれた。)一人^{ひとり}では手^てが足^たりぬので、彼^{かれ}は自^じ分^{ぶん}の息^{むすこ}子^{るんとう}の閩^{さい}土^きに祭^{さい}器^き
の番^{ばん}をさ^させたいが、とわたし^{ちち}の父^{ちち}に申^{もう}し出^でた。

ちち
父^{ちち}はそれ^{ゆる}を許^{ゆる}した。わたしもうれしかった。というの^{るんとう}は、かねて^な閩^な土^なという名^な
は^{みみ}耳^{みみ}にしてい^{おな}たし、同^{おな}じ年^{とし}ごろな^なこと、また^{うるうづき}閩^う月^うの生^うまれで、^{ごぎやう}五^ご行^{ぎやう}の^{つち}土^{つち}が欠^かけ
てい^{ちちおや}るので^{るんとう}父^な親^なが^{しやうち}閩^{しやうち}土^{しやうち}と名^なづけた^{しやうち}こと^{しやうち}も承^{しやうち}知^{しやうち}してい^{しやうち}たから。彼^{かれ}はわ^{かれ}な^{かれ}を^{かれ}かけ

小鳥^{とり}を捕^とるのがうまかった。

それからというもの、来^くる日^ひも来^くる日^ひも新年^{しんねん}が待^まち遠^{とお}しかった。新年^{しんねん}になれば
閨土^{るんとう}がや^くって来^まる。待^まちに待^まった年^{ねん}末^{まつ}になり、ある日^ひのこと、母^{はは}がわ^らたしに、閨土^{るんとう}
が来^きたと知^しらせてくれた。と^とんでい^いてみ^みると、彼^{かれ}は台^{だい}所^{どころ}にいた。つやのい^い
丸^{まる}顔^がで、小^{ちい}さな毛^け織^おりの帽^{ぼう}子^しをか^かぶり、キ^ひラキ^かラ光^{ぎん}る銀^くの首^く輪^わをは^はめていた。そ
れは父^{ちち}親^{おや}の溺^で愛^きぶ^りを示^{しめ}すもので、ど^どうか息^{むすこ}子^しが死^しなな^いようにと神^{しん}仏^{ぶつ}に願^{ながい}
か^かけて、その首^く輪^わでつな^とぎ止^とめてあるのだ。彼^{かれ}は人^{ひと}見^み知^しりだ^だったが、わ^わたしにだ
けは平^{へい}氣^きで、そばにだ^だれもい^いない^いとよ^よく口^{くち}をき^きいた。半^{はん}日^{にち}もせ^せず^ずにわ^わたし^しち^ちは
仲^{なか}よ^よくな^なった。

その時^{とき}何^{なに}をしゃべ^べったかは、覚^{おぼ}えてい^いない。た^ただ閨土^{るんとう}が、城^{じょう}内^{ない}へ来^きてい^いろい
ろ珍^{めづ}しいものを見^みたとい^いって、は^はしゃい^いでいたことだ^だけは記^き憶^{おく}に^の残^こっている。
あ^あ明^ひくる日^と、鳥^{とり}を捕^とって^とくれと頼^{たの}むと、彼^{かれ}は、「だ^だめだ^だよ。大^{おお}雪^{ゆき}が降^ふって^てからで
な^なき^きや。お^おいら^らと^とこ、砂^す地^{なち}に雪^{ゆき}が降^ふるだ^だろ。そ^そう^うし^した^たら雪^{ゆき}をか^かいて、少^すし^し空^あき^ち地^ち
をこ^こし^しら^らえ^える^るんだ。そ^それ^れか^から、大^{おお}き^きな^なか^かご^ごを^も持^もっ^てて^てき^きて、短^{みじ}い^いつ^つか^かえ^え棒^{ぼう}を^かっ^て
て、く^くず^ずも^もみ^みを^まく^くんだ。そ^そう^うす^すると、小^こ鳥^{とり}が来^くて食^くう^うか^から、その時^{とき}遠^{とお}く^くの^{ほう}方^{ほう}
ら、棒^{ぼう}に^ゆ結^ゆわ^わえ^えてある^な縄^{なわ}を^ひ引^ひっ^ぱる^るんだ。そ^そう^うす^すると、み^みん^んな^なか^かご^ごか^から逃^にげ^げら^られ
ない^いんだ。なん^{なん}だ^だっ^てい^いる^るぜ。稻^た鷄^おだ^だの、角^ち鷄^あだ^だの、鳩^はだ^だの、藍^{らん}背^{べい}だ^だの……。」
そ^それ^れか^から^らは雪^{ゆき}の^ふ降^ふる^るの^まが^ま待^とち^と遠^{とお}し^しく^くな^なった。

るんとう
閨土はまた言うのだ。

「今は寒いけどな、夏になったら、おいらとこへ来るといいや。おいら、昼間は
海へ貝殻拾いに行くんだ。赤いのも、青いのも、なんでもあるよ。『鬼おどし』
もあるし、『観音様の手』もあるよ。晩には父ちゃんと西瓜の番に行くのさ。お
まえも来いよ。」

「どろぼうの番？」

「そうじゃない。通りがかりの人が、のどが渴いて西瓜を取って食ったって、そ
んなの、おいらとこじゃどろぼうなんて思やしない。番するのは、あなぐまや、
はりねずみや、チャーさ。月のある晩に、いいかい、ガリガリって音がしたら、
チャーが西瓜をかじってるんだ。そうしたら手に刺叉を持って、忍び寄って…
…」

その時わたしはその「チャー」というのがどんなものか、見当もつかなかった
——今でも見当はつかない——が、ただなんとなく、小犬のような、そして獐猛
な動物だという感じがした。

「かみつかない？」

「刺叉があるじゃないか。忍び寄って、チャーを見つけたら突くのさ。あんちく
しょう、りこうだから、こっちへ走ってくるよ。そうしてまたをくぐって逃げて
しまうよ。なにしろ毛が油みたいにすべっこくて……。」

こんなにたくさん珍しいことがあろうなど、それまでわたしは思ってもみな

かった。海には、そのような五色の貝殻があるものなのか。西瓜には、こんな危険な経歴があるものなのか。わたしは西瓜といえ、果物屋に売っているものとはばかり思っていた。

「おいらとこの砂地では、高潮の時分になると『跳ね魚』がいっぱい跳ねるよ。

みんなかえるみたいな足が二本あって……。」

ああ、閩土の心は神秘の宝庫で、わたしの遊び仲間とは大違いだ。こんなことはわたしの友達は何も知ってはいない。閩土が海辺にいる時、彼らはわたしと同様、高い塀に囲まれた中庭から四角な空を眺めているだけなのだ。

惜しくも正月は過ぎて、閩土は家へ帰らねばならなかった。別れがつらくて、わたしは声をあげて泣いた。閩土も台所の隅に隠れて、嫌がって泣いていたが、とうとう父親に連れてゆかれた。そのあと、彼は父親にことづけて、貝殻を一包みと、美しい鳥の羽を何本か届けてくれた。わたしも一、二度何か贈り物をしたが、それきり顔を合わす機会はなかった。

今、母の口から彼の名が出たので、この子供のころの思い出が、電光のように一挙によみがえり、わたしはやっと美しい故郷を見た思いがした。わたしはすぐこう答えた。

「そりゃいいな。で——今、どんな？ ……。」

「どんなって……やっぱり、楽ではないようだが……。」そう答えて母は、戸外

へ^め目をやった。

「あの連^{れんちゆう}中^さ、また来^きている。道具^{どうぐ}を^か買^かうという口実^{こうじつ}で、その辺^{へん}にあるものを勝^か手^てに持^もっていくのさ。ちょっ^みと^み見てくるからね。」

母^{はは}は立^たち上^あがって出^でてい^{そと}った。外^{そと}では、数^{すうにん}人^{おんな}の女^{こえ}の^{こえ}声^{こえ}が^{こえ}して^{こえ}いた。わたしは
宏^{ほん}児^るをこ^よちらへ呼^よんで、話^{はな}し相^あ手^てにな^なってや^やった。字^じは^か書^かける？　よそへ行^いくの、
う^うれ^れしい？　な^など^どな^など。

「汽^き車^{しゃ}に乗^のってゆ^ゆくの？」

「汽^き車^{しゃ}に乗^のってゆ^ゆくん^だよ。」

「お^{ふね}船^{ふね}は？」

「初^{はじ}め^めに、お^{ふね}船^{ふね}に乗^のって……。」

「まあまあ、こんなにな^なって、ひげを^{ひげ}こんな^にに生^なや^やして。」不^ふ意^いにか^だん^{こえ}高^{たか}い^{こえ}声^{こえ}が
ひび
響^{ひび}いた。

びっ^{あたま}くり^あして頭^{あたま}を^あ上^あげてみ^みると、わ^わた^たし^しの^の前^{まへ}には、ほ^ほお^お骨^{ほね}の^で出^でた^た、唇^{くちびる}の^{うす}薄^{うす}
い、五^ご十^{じゅう}が^がら^らみ^みの^の女^{おんな}が^た立^たっ^{りょうて}て^{こし}いた。両^{りょうて}手^てを^{こし}腰^{こし}にあ^あて^てが^がい、ス^スカ^カー^ート^トを^をは^はか^かない
ズ^ずボ^ボン^ン姿^さで^で足^{あし}を^{ひら}開^{ひら}いて^た立^たった^たと^ところ^{ころ}は、ま^{せい}る^ずで^{よう}製^{せい}図^ず用^{よう}の^{あし}脚^{あし}の^{ほそ}細^{ほそ}い^いコ^コン^ンパ^パス^スそ^そ
く^くり^りだ^だった。　わ^わた^たし^しは^はド^ドキ^キン^ンと^とした^{した}。

「忘^{わす}れ^れた^たか^かね？　よ^よく^くだ^だっ^こし^して^てあ^あげ^げた^たも^もの^のだ^だが。」

ま^ます^すま^ます^すド^ドキ^キン^ンと^とした^{した}。幸^{さいわ}い^い、母^{はは}が^{あらわ}現^{こつぞえ}れ^えて^て口^{くち}添^{ぞえ}し^して^てく^くれ^れた^た。

「長^{なが}い^いこ^こと^と家^{みわす}に^にい^いな^なか^かった^たか^から、見^み忘^{わす}れ^れて^てし^しま^まっ^{おぼ}て^てし^しま^まっ^{おぼ}て^てね。お^おま^まえ^え、覚^{おぼ}え^えて^てい^いる^るだ^だろ。」

とわたしに向かって、「ほら、^{すじむ}筋向かいの^{よう}楊おばさん……^{とうふや}豆腐屋の。」

そうそう、^{おも}思い出した。そういえば^{こども}子供のころ、^{すじむ}筋向かいの^{とうふや}豆腐屋に、^{よう}楊おばさんという^{ひと}人が一日^{いちにち}じゅう座^{すわ}っていて、「^{とうふやこまち}豆腐屋小町」と呼ばれていたっけ。し

かし、その^{ひと}人なら^{おしろい}白粉を^ぬ塗っていたし、^{ほね}ほお骨もこんなに^で出ていないし、^{くちびる}唇も

こんなに^{うす}薄くはなかったはずだ。それに一日^{いちじつ}じゅう座^{すわ}っていたのだから、こんな

コンパスのような^{しせい}姿勢は、^み見ようにも^み見られなかった。そのころうわさでは、

^{かのじょ}彼女のおかげで豆腐屋は^{しょうばいはんじょう}商売繁盛だとされた。たぶん^{ねんれい}年齢のせいだろうか、わ

たしはそういうことにさっぱり^{かんしん}関心がなかった。そのため^{みわす}見忘れてしまったの

である。ところがコンパスのほうでは、それがいかにも^{ふふく}不服らしく、さげすむよ

うな^{ひょうじょう}表情^みを見せた。まるでフランス人^{じん}のくせにナポレオンを^し知らず、アメリカ

人^{じん}のくせにワシントン^しを知らぬのをあざけるといった^{ちょうし}調子で、^{れいしょう}冷笑^うを浮かべながら、

「^{わす}忘れたのかい？　なにしろ^{みぶん}身分のあるおかたは^{うえ}目が上を向いているからね…」

「そんなわけじゃないよ……ぼくは……。」わたしはどぎまぎして、^{たあ}立ち上がった。

「それならね、^きお聞きなさいよ、^{しゅん}迅ちゃん。あんた、^{かねも}金持ちになったんでしょ。

^も持ち運びだって、^{おも}重くて^{ふべん}不便ですよ。こんなガラクタ^{どうぐ}道具、じゃまだから、あた

しにくれてしまいなさいよ。あたしたち^{びんぼうにん}貧乏人には、^{やく}けっこう役^たに立ちますからね。」

「ぼくは^{かねも}金持ちじゃないよ。これを^う売って、その^{かね}金で……。」

「おやおや、まあまあ、^{ちじさま}知事様になっても^{かねも}金持ちじゃない？ ^{げんめかけさん}現にお^{めかけさん}妾が三人

もいて、お^で出まは^{はちにん}八人かきのかごで、それでも^{かねも}金持ちじゃない？ フン、だま
そうたって、そうはいきませんよ。」

^{へんじ}返事のしょうがないので、わたしは^{くちと}口を閉じたまま^た立っていた。

「ああ、ああ、^{かね}金がたまれば^{さいふ}財布の^しひもを締める。^{さいふ}財布の^しひもを締めるからまた
たまる……。」コンパスは、ふくれつつらで^{せむ}背を向けると、ぶつぶつ^い言いながら、
ゆっくりした^{あし}足どりで^で出ていった。^ゆ行きがけの^{だちん}駄賃に母の^{てぶくろ}手袋をズボンの^{した}下へ
ねじ込んで。

そのあと、^{さんじょ}近所にいる^{しんせき}親戚が何人も^{なんにん}訪ねてきた。その^{たず}応対に^{おうたい}追われながら、^お暇
をみて^に荷ごしらえをした。そんなことで^し四、^{ごにち}五日つぶれた。

ある^{さむ}寒い^ひ日の^{ごご}午後、わたしは^{しょくご}食後の^{ちゃ}茶でくつろいでいた。^{おもて}表に^{ひと}人の^{けはい}気配がし
たので、^{ふむ}振り向いてみた。^{おも}思わず^{こえ}アッと^で声が出かかった。^{いそ}急いで^た立ち^{あが}上がって^{むか}迎
えた。

^き来た^{きやく}客は^{るんとう}閩土である。ひと^め目で^{るんとう}閩土とわかったものの、その^{るんとう}閩土は、わたし
の^{きおく}記憶にある^{るんとう}閩土とは^に似もつかなかった。^{せたけ}背丈は^{ばい}倍ほどになり、^{むかし}昔の^{つや}つやのい
^{まるがお}丸顔は、^{いま}今では^き黄ばんだ^{いろ}色に^か変わり、しかも^{ふか}深い^ししわが^めたたまれていた。目も、
^{かれ}彼の^{ちちおや}父親が^{まわ}そうであつたように、^{あか}周りが^し赤くはれている。わたしは^し知っている。

^{うみべ}海辺で^{こうさく}耕作する^{もの}者は、^{いちにち}一日^{しおかぜ}じゅう潮風に^ふ吹かれる^{あた}せいで、よく^{あたま}こうなる。頭

は古^{ふる}ぼけた毛^け織^おりの帽^{ぼう}子^し、身^みには薄^{うす}手^での綿^{わた}入^いれ一^{いち}枚^{まい}、全^{ぜん}身^{しん}ぶるぶる震^{ふる}えている。

紙^{かみ}包^{づつ}みと長^{なが}いきせるを^て手^さに提^てげている。その手^ても、わたしの記^き憶^{おく}にある血^け色^{しよく}の
いい、まるまるした手^てではなく、太^{ふと}い、節^{ふし}くれだった、しかもひび割^われた、松^{まつ}の
幹^{みき}のよう^てな手^てである。

わたしは感^{かん}激^{げき}で胸^{むね}がっぱいになり、しかしど^{くち}う口^{くち}をきいたものやら思^し案^{あん}が
つかぬま^{こと}まに、ひと言^{こと}、「あ^{るん}あ、閨^{るん}ちゃん——よく来^きたね……。」

つづいて言^いいたいことが、あとからあとから、数^{じゅう}珠^ずつな^なぎにな^でって出^でかかった。

角^{ちあ}鶏^お、跳^はね魚^{うお}、貝^{かい}殻^{がら}、チャー……だがそれらは、何^{なに}かでせき止^とめられたように、

頭^{あたま}の中^{なか}を駆^かけめぐるだけで、口^{くち}からは出^でなかつた。

彼^{かれ}は突^つ立^たったま^たまだった。喜^{よろこ}びと寂^{さび}しさの色^{いろ}が顔^{かお}に現^{あらわ}れた。唇^{くちびる}が動^{うご}いた
が、声^{こえ}にはな^ならなかつた。最^{さい}後^ごに、うやうやしい態^{たい}度^どに変わ^かって、は^はっきりこ^こう
言^いった。

「だ^{さま}んな様^{さま}！ ……」

わたしは身^み震^{ふる}いした^した^{しか}つた。悲^{かな}しむべき厚^{あつ}い壁^{かべ}が、二^{ふた}人^{たり}の^{あい}間^だを隔^{へだ}ててし
ま^{かん}ったの^{くち}を感じ^{かん}じた。わたしは口^{くち}がきけなかつた。

彼^{かれ}は後^{うし}ろを向^むいて、「水^{しゅ}生^{いしん}、だ^{さま}んな様^{さま}におじぎしな。」と^い言^いって、彼^{かれ}の背^せに隠^{かく}
れて^こいた子^こ供^{ども}を前^{まえ}へ出^だした。これぞま^{さん}さしく三^{さん}十^{じゅう}年^{ねん}前^{まえ}の閨^{るん}土^{とう}であ^あった。いく^{いく}ら
かや^かせて、顔^{かお}色^{いろ}が悪^{わる}く、銀^{ぎん}の首^{くび}輪^わもして^{ちが}いない違^{ちが}いはあ^ある^るけ^けれ^れども。「こ^ごれ^{ばん}が五^ご番^{ばん}

めの子でございます。世間へ出さぬものですから、おどおどしておりますて…」

母と宏児が二階から降りてきた。話し声を聞つけたのだろう。

「ご隠居様、お手紙は早くにいただきました。全く、うれしくてたまりません

でした、だんな様がお帰りになると聞きまして……。」と閨土は言った。

「まあ、なんだってそんな、他人行儀にするんだね。おまえたち、昔は兄弟の

仲間じゃないか。昔のように、迅ちゃん、でいいんだよ。」と母は、うれしそう

に言った。

「めっそうな、ご隠居様、なんとも……とんでもないこととございます。あのこ

ろは子供で、なんのわきまえもなく……。」そしてまたも水生を前に出してお

じぎさせようとしたが、子供ははにかんで、父親の背にしがみついたままだった。

「これが水生？ 五番めだね。知らない人ばかりだから、はにかむのも無理な

い。宏児や、あちらで一緒に遊んでおやり。」と母は言った。

言われて宏児は、水生を誘い、水生もうれしそうに、そろって出ていった。

母は閨土に席を勧めた。彼はしばらくためらったあと、ようやく腰を下ろした。

なが長ぎせるをテーブルに立てかけて、紙包みを差し出した。

「冬場は、ろくなものがございません。少しばかり、青豆の干したのですが、自分
とこのですから、どうかだんな様に……。」

わたしは、暮らし向きについて尋ねた。彼は首を振るばかりだった。

「とてもとても。今では六番めの子も役に立ちますが、それでも追っつけません……世間は物騒だし……どっちを向いても金は取られようだい、きまりもなにも……作柄もよくございませぬ。作った物を売りに行けば、何度も税金を取られて、元は切れるし、そうかといって売らなければ、腐らせるばかりで……。」

首を振りどおしである。顔にはたくさんのしわがたたまれているが、まるで石像のように、そのしわは少しも動かなかった。苦しみを感ぜはしても、それはい言ひ表すすべがないように、しばらく沈黙し、それからきせるを取り上げて、黙々とたばこをふかした。

母が都合をきくと、家に用が多いから、明日は帰らねばならぬという。それに昼飯もまだと言うので、自分で台所へ行つて、飯をいためて食べるように勧めた。

彼が出ていったあと、母とわたしとは彼の境遇を思つてため息をついた。子供だくさん、凶作、重い税金、兵隊、匪賊、役人、地主、みんな寄つてたかつて彼をいじめて、デクノボーみたいな人間にしてしまったのだ。母は、持っていかなぬ品物はみんなくれてやろう、好きなように選ばせよう、とわたしに言った。

午後、彼は品物を選び出した。長テーブル二個、いす四脚、香炉と燭台一組み、大秤一本。そのほか灰もみんな欲しいと言つた。（わたしたちのところでは、炊事の時わらを燃す。その灰は砂地の肥料になる。）わたしたちが旅立つ

とき き ふね はこ い
時来て船で運ぶ、と言った。

よ
夜はまた世間話をした。とりとめのない 話はばかりだった。あ みる ひ あさ かれ
は 水 生 を連れて帰っていった。

それからまた九日して、わたしたちの旅立ちの日になった。るんとう あさ き
いた。水 生 は連れずに、五歳になる 女の子に船の番をさせていた。それぞれ
に一日じゅう 忙しくて、もう 話をする暇はなかった。きゃく おお みおく
に来る者、品物を取りに来る者、見送りがてら品物を取りに来る者。夕方になっ
て、わたしたちが船に乗り込むころには、この古い家にあった大 小さまぎまの
ガラクタ類は、すっかり片づいていた。

ふね
船はひたすら前進した。りょうがん みどり やまやま なか うすずみいろ か
次々と船尾に消えた。

わたしと一緒に窓辺にもたれて、暮れてゆく外の景色を眺めていた宏児が、ふ
と問いかけた。

「おじさん、ぼくたち、いつ帰ってくるの？」

「帰ってくる？ どうしてまた、行きもしないうちに、帰るなんて考えたんだ
い？」

「だって、水 生 がぼくに、家へ遊びに来たって。」

おお くろ め
大きな黒い目をみはって、彼はじっと 考えこんでいた。

わたしも、わたしの母^{はは}も、はっと胸^{むね}をつかれた。そして話^{はなし}がまた閨土^{るんとう}のこと
に^{もと}戻^{はは}った。母^{はは}はこ^{かた}う語^{れい}った。例^{れい}の豆腐屋^{とうふや}小町^{こまち}の楊^{よう}お^おば^ばさん^{さん}は、わたしの家^{いえ}で片^{かた}づ
け^{はじ}が始^{はじ}まってから、毎^{まい}日^{にち}必^{かなら}ずや^やってき^きたが、お^おと^とい^い、灰^{はい}の山^{やま}からわ^わん^んや皿^{さら}を
十^{じゅう}個^こあ^あま^まり掘^ほり出^だした。あ^あれ^れこ^これ議^ぎ論^{ろん}の末^{すえ}、そ^それ^れは閨土^{るんとう}が埋^うめてお^おいたにち^ちが^がい
な^ない、灰^{はい}を運^{はこ}ぶ時^{とき}、一^{いっ}緒^{しょ}に持^もち帰^{かえ}れるから、と^とい^いう結^{けつ}論^{ろん}にな^なった。楊^{よう}お^おば^ばさん^{さん}は、
こ^この発^{はっ}見^{けん}を手^て柄^{がら}顔^{かお}に、^{いぬ}「犬^{いぬ}じらし」(こ^これはわ^わたし^たち^ちのと^とこ^ころで^{にわとり} 鶏^かを飼^かうの^のに
つか^{つか}う。木^きの板^{いた}にさ^さくを^と取^とり付^つけた道^{どう}具^ぐで、中^{なか}に食^たべ物^{もの}を^い入^いれてお^おく^くと、^{にわとり} 鶏^{くび}は首^{くび}
を^の伸^のばしてつ^つい^いば^ばむこ^ことが^{いぬ}で^みき^みるが、犬^{いぬ}に^みは^みで^みき^みない^みので、見^みて^みじ^みれる^みだけ^みであ
る。)をつ^とか^かん^んで飛^とぶ^{はし}よ^さうに走^{あし}り^{よう}去^{そこ}った。て^たん^た足^{かい}用^{くつ}の底^ちの^{おも}高^{おも}い^{おも}靴^{おも}で、よ^よく^よも^よと思^{おも}
う^{はや}ほ^はど速^{はや}か^かった^かそ^そう^うだ。

古^{ふる}い家^{いえ}はま^とす^とま^とす遠^とく^とな^なり、故^{ふる}郷^{さと}の山^{やま}や水^{みず}もま^とす^とま^とす遠^とく^とな^なる。だ^なが名^な残^{ごり}惜^おし
い^き気^きは^じし^じない。自^じ分^{ぶん}の周^{まわ}りに目^めに^み見^みえぬ^え高^たい^{かい}壁^{かべ}が^{なか}あ^じっ^じて、そ^との^と中^{なか}に自^じ分^{ぶん}だ^とけ^と取^とり
の^のこ^こ残^{のこ}さ^された^さよ^ように、気^きが^{すい}め^いい^かる^たけ^{げん}だけ^くである。西^し瓜^{くわ} 畑^{はたけ}の銀^{ぎん}の首^{くび}輪^わの^{しょう}小^{えい}英^{ゆう}雄^おの^{おも}面^{おも}影^{かげ}は、
も^{せん}と^{めい}は鮮^{せん}明^{めい}こ^この^{いま}う^きえ^きな^きか^きつ^きた^きの^きが、今^{いま}で^きは^き急^きに^きぼ^きん^きや^きり^きし^きて^きし^きま^きつ^きた。こ^これ^こも
た^{かな}ま^{かな}ら^{かな}なく悲^{かな}しい。

母^{はは}と宏^{ひろ}児^ことは寝^ね入^いった。

わたしも横^{よこ}にな^ふって、船^{ふね}の底^{そこ}に水^{みず}のぶ^おつ^とか^きる^き音^{おと}を^{いま}聞^きき^じな^じが^じら^じ、今^{いま}、自^じ分^{ぶん}は、自^じ分^{ぶん}
の^{みち}道^{ある}を^{おも}歩^おいて^{るんとう}い^きると^きわ^まか^とつ^とた。思^{おも}え^きば^きわ^きた^きし^きと^き閨土^{るんとう}と^きの^き距^き離^りは^ま全^まく^と遠^とく^とな^とつ^とた

が、若い世代は今でも心^{こころ}が通^かい合^あい、現^{げん}に宏児^{ほん}は水生^{しん}のことを慕^{した}っている。せ

めて彼^{かれ}らだけは、わたしと違^{ちが}って、互^{たが}いに隔^{かく}絶^{ぜつ}することのないように……とはい

っても、彼^{かれ}らが一つ心^{ひとつこころ}でいたい^{たい}がために、わたしのよう^{よう}に、無^む駄^だの積^つみ重^{かさ}ねで

魂^{たまし}をすり減^{へら}らす生活^{せいかつ}をと^ともにする^{する}ことは願^{ねが}わない。また閨土^{るんとう}のよう^{よう}に、打^うちひ

しがれて心^{こころ}がま^まひする生活^{せいかつ}をと^ともにする^{する}ことも願^{ねが}わない。また他^たの人^{ひと}のよう^{よう}に、

やけを起^おこしてのほうず^ずに走^{はし}る生活^{せいかつ}をと^ともにする^{する}ことも願^{ねが}わない。希望^{きぼう}をいえ

ば、彼^{かれ}らは新^{あた}しい生活^{せいかつ}をもた^もたなくてはならない。わたしたちの経^{けい}験^{けん}しなかつた

新^{あた}しい生活^{せいかつ}を。

希望^{きぼう}という考^{かん}えが浮^うかんだので、わたしはどき^{どき}とした。たしか閨土^{るんとう}が香^{かう}炉^ろ

と燭^{しよく}台^{だい}を所^{しよ}望^{もう}した時^{とき}、わたしはあ^あい変^かわらずの偶^{ぐう}像^{ぞう}崇^{そう}拝^{はい}だな、いつになつたら

忘^{わす}れるつもりかと、心^{こころ}ひそかに彼^{かれ}のこ^こを笑^{わら}ったものだが、今^{いま}わたしのいう

希望^{きぼう}も、やはり手^て製^{せい}の偶^{ぐう}像^{ぞう}にすぎぬ^ぬのではないか。ただ彼^{かれ}の望^{のぞ}むものはすぐ手^てに

入^{はい}り、わたしの望^{のぞ}むものは手^てに入^{はい}りにく^くいだけだ。

まどろみかけたわたしの目^めに、海^う辺^みの広^{ひろ}い緑^{みどり}の砂^{すな}地^ちが浮^うかんでくる。その上^{うえ}

の紺^{こん}碧^{ぺき}の空^{そら}には、金^{こん}色^{じき}の丸^{まる}い月^{つき}がかかっている。思^{おも}うに希望^{きぼう}とは、もともとある

ものとも言^いえぬし、ないものとも言^いえない。それは地^ち上^{じょう}の道^{みち}のよう^{よう}なものである。

もともと地^ち上^{じょう}には道^{みち}はない。歩^{ある}く人^{ひと}が多^{おほ}くなれば、それが道^{みち}になるのだ。

P119 漢字 2

かんじ ぞうごりよく
漢字の造語力

P120 練習問題

①

りせい ものごと すじみち た かんが はんだん のうりよく
理性：物事を筋道立てて考え、判断する能力。

ろんり ひと い かた どうとく
論理：人としてあるべき生き方や道徳。

ふへん すべ あ
普遍：全てのものに当てはまること。

けいやく ばいばい か か やくそく か
契約：売買や貸し借りの約束を交わすこと。

りじゅん きぎょう りえき
利潤：企業などがある利益。

ゆうよ ものごと けっこう とさ さき の
猶予：物事を決行する時を先に延ばすこと。

②

しょくひん しょうひきげん たし
食品の消費期限を確かめる。

さんざうはいきぶつ しょうぶん
産業廃棄物を処分する。

にほん しょくりょうじきゅうりつ ちょうさ
日本の食料自給率を調査する。

じゅんかんがたしやか いこう かいぎ ぎだいのば
循環型社会への移行を会議の議題に上せる。

せいぶつたようせい いじ とりくみ しじ
生物多様性を維持する取り組みを支持する。

くに じゅうようむけいぶんかざい かぶき かんしょう
国の重要無形文化財である歌舞伎を鑑賞する。

③

きゅうけい とり たいりょく しょうもう しょうひ おさ
休憩を取り、体力の消耗（消費）を抑える。

たにん れいぞく じゅんぞく
他人に隷属（順属）することをよしとしない。

じじつ こくめい たんねん え が い たぎょく
事実を克明（丹念）に描いた戯曲。

じん しい ぶじょく ちじょく う ふんが
甚しい侮辱（恥辱）を受けて憤慨する。

かれ さくひん ほか ほんよう へいぼん さくひん いっせん かく
彼の作品は、他の凡庸（平凡）な作品とは一線を画する。

ぼうくん こくがい ほうつい ついぼう
暴君が国外へ放逐（追放）される。

せいじか しょみん たいしゅう うったえ みみ かたむ
政治家は庶民（大衆）の訴えに耳を傾けるべきだ。

ふしょうじ お いいん ひめん めんしょく せきにん
不祥事を起こして委員の罷免（免職）責任。

せいふ はんらん ちんあつ せいあつ
政府によって反乱が鎮圧（制圧）される

④

じょうみやく・どうみやく き ち ・ み ち ぜんぞう・ぜんげん へいさ・かいほう
静脈/動脈 既知/未知 漸増/漸減 閉鎖/開放

りゅうき・かんぼつ じょじょう・じょじ たいほ・しゃくほう れいじょう・れいそく
隆起/陥没 叙情/叙事 逮捕/釈放 令嬢/令息

⑤

こせきとうほん しつじつごうけん まんじょういっち わようせつちゅう ちゅうすうしんけい こうきしゅくせい
戸籍謄本 質実剛健 満場一致 和洋折衷 中枢神経 綱紀肅正

きじょう こうちよう むねさんよう くら ひつぜつ つ
⑥机上の空調 胸算用 お蔵入り 筆舌に尽くしがたい

じもく あつ み ぞ う めんぼく ほどこす あたいせんきん つつうらうら すけだち
耳目を集める 未曾有 面目を施す 値千金 津々浦々 助太刀

新習漢字

1. 閉塞感^{へいそくかん}を打開^{だかい}する。

激^{はげ}しい葛藤^{かつとう}が生^{しょう}じる。

その発言^{はつげん}は辛辣^{しんらつ}だ。

雨^{あめ}が続き^{つづき}、憂鬱^{ゆううつ}だ。

丁寧^{ていねい}な仕事^{しごと}ぶりを褒^ほめる。

恣意^{しいてき}的な判断^{はんだん}を避^さける。

2. 羞恥^{しゅうち}を感^{かん}じる。

意匠^{いしょう}を凝^こらす。

天賦^{てんぷ}の才^{さい}。

家族^{かぞく}を扶養^{ふよう}する。

寡黙^{かもく}の人^{ひと}。

3. 適宜^{てきぎ} 学生寮^{がくせいりょう} 主宰^{しゅさい} 静寂^{せいじやく}

4. 滋養じょう（滋賀県しがけん） 才媛さいえん（愛媛県えひめけん）
天井てんじょう（福井県ふくいけん）
縄文土器じょうもんどき（沖縄県おきなわけん）

5. 有自己的思想 P123

评价对方，在多样性中确立自己的想法。

阅读以下两篇有关人类和人工智能关系的文章，总结自己的想法。

1. 人工智能和未来

作者：羽生善治

1970 年埼玉县出身。象棋棋士。著作有《大局观》《人工智能的核心》（共著）。本文专为本教材书写。



2. 人类和人工智能和创造性

作者：松原仁

1959 年东京都出身。人工智能研究者。著作有《AI 可以有情感吗》等。本文专为本教材书写

课文 1:

人工智能和未来

人类在悠久的历史中，以“只有人类才具有高智能”为前提的环境里生存至今。但现在却是“人工智能（AI）可以超越人类智能”或“人类具有人工智能无法做到的能力”等各种言论争议的时代。如今人工智能（AI）已经开始渗透社会，今后的课题是人类如何对待它。

令人深思的是现在带有耐人寻味的象棋软件和人类棋士之间发生的现象。我觉得它事先提醒了我们今后社会应有的姿态。在此我想先谈谈棋士们面对的一些不对路的感觉。

第一，人工智能思考的过程是一个“黑箱”（注释：内部处理不明）。象棋软件以过去的庞大数据为基础，判断眼前局面的形势是有利还是不利，然后得出被叫做

“评价值”的数值。这个数值越偏向“正”就越有利，越偏向“负”就越不利。因为“评价值”非常有效的工作，现在就连专业棋手都参考它。但现状是我们人类无法了解如此庞大的信息是通过怎样的处理才得出结论。虽然社会正在接纳人工智能，但对决定意志的过程为“黑箱”这一点，很多人都感到不安。

第二，在使用象棋软件的棋士之间有个共同的认知：“人工智能谁都不怕”。人工智能只是将过去的数据为基础走下一步棋而已，即使是我们人感到危险和不安或者不对劲的下法，它也毫无顾虑地将棋子下过来。让棋士们感到恐惧。如果将象棋软件转换为人工智能机器人的话会怎么样呢？人在无意识中寻求的价值和伦理（安心感和安全感等）是不能和人工智能共有的。那么又怎样才能安心地和对方共享社会生活呢？我对此确实没有信心。

人工智能拥有庞大的数据和强大的计算力，以此得出最正确的答案。相对人类是凭借从经验中培养的“审美意识”来判断事物的。如果人工智能在社会的各种场合参与决定意识的话，一定会发生人类的“审美意识”不能容忍的判断。此外，象棋软件的评价值以及人工智能的判断并不是绝对的。也就是说，包括我们人类对参考值的判断能参考多少，再做选择的时候是需要考虑的。这种判断力只有在平时的思考中才能养成。

即使人工智能渗透社会，正因为这样我们今后仍然需要自己去思考和判断。虽然我们不能拭去对人工智能的疑问和不安，但是既然无法阻止它的到来，比起将它设为“敌人”畏惧，还不如想今后的对应方式更现实。

再有，如果能将人工智能活用的话，对于人类无疑会成为巨大的力量。刚才提到象棋软件可以走出我们预想不到的一步棋，我们可以从中学习灵活改变立场的想法和做法。有时也可以“自己是这样想，人工智能怎么想呢？”利用参考人工智能得出“更好的选择”。此外，还可以将人工智能得出的结论为基础，分析结论形成的过程，来宽展自己思考的范围也是很好的利用方法。这样我们不会将所有的判断都交给人工智能，而是从人工智能那里学习新的思考方式和对事物的见解，这才富有建设性。

实际在象棋这个领域已经参考人工智能提示的方法想出一些新的走法，使象棋技术有所进步的例子不为少数。可以说这些是因为人工智能使人类的“审美意识”有所改变的显著事例。人工智能在不断学习，人类也从人工智能那里不断学习。我认为在两者共存的时代，一定能建立一个新的关系。

汉字练习

じんこうちのう 人工知能 人工智能	みらい 未来 未来	じんるい 人類 人类	れきし 歴史 历史	ちせい 知性 知性	かんきょう 環境 环境
ぜんてい 前提 前提	こ 超える 超过	ぎやく 逆に 相反	げんせつ 言説 言说	と飛びあ 合う 相传	じだい 時代 时代
しゃかい 社会 社会	しんとう 浸透 渗透	かだい 課題 课题	きょうみぶか 興味深い 感兴趣	げんざい 現在 现在	とうさい 搭載 搭配
しょうぎ 将棋 象棋	じしょう 事象 现象	さきと 先取り 提前	きし 棋士 棋士	ちよくめん 直面 面对	いわかん 違和感 违和感
しこう 思考 思考	かじょう 過剰 过剩	ぼうだい 膨大 庞大	もと 基に 基础	きよくめん 局面 局面	ゆうり・ふり 有利/不利 有利/不利
けいせい 形勢 形势	はんだん 判断 判断	ひょうか 評価 评价	すうち 数值 数值	いとな 営む 经营	しょうじき 正直 正直
かくしん 確信 确信	きょうだい 強大 强大	けいさんりよく 計算力 计算能力	さいてきかい 最適解 最佳答案	みちび 導く 引导	けいけん 経験 经验
びいしき 美意識 审美意识	はたら 働く 作用	ものごと 物事 事物	ばめん 場面 场面	いしけつてい 意思決定 決定意识	かんよ 関与 参与
うい 受け入れる 接受	ぜったいてき 絶対的 绝对的	ただ 正しい 正确	さんこう 参考 参考	ふく 含む 包含	せんたくし 選択肢 可选择
ひつよう 必要 必要	ふだん 普段 平常	やしな 養われる 培养	ぬぐさ 拭い去る 抹去	とうらい 到来 到来	さ 避ける 躲避
かそうてき 仮想敵 假设对手	いち 位置づけ 定为	きぐ 危惧 担心	たいおう 対応 对应	げんじつてき 現実的 现实的	かつよう 活用 活用

の 述べる 描述	し ざ 視座 视点	み か た 見方 看法	け つ ろ ん 結論 结论	か て い 過程 过程	ぶ ん せ き 分析 分析
は ば ひ ろ 幅を広げる 扩大范围	ゆ だ 委ねる 委托	あ ら 新たな 新的	は っ そ う 発想 想象	け ん せ つ て き 建設的 建设性	じ っ さ い 實際 实际
す で 既に 已经	て い じ 提示 提示	ぎ じ ゅ つ 技術 技术	し ん ぽ 進歩 进步	お こ る 起こる 发生	け ん ち ょ 顕著 显著
じ れ い 事例 事例	が く し ゅ う ・ ま な 学 習 / 学 ぶ 学习	に ん げ ん が わ 人間側 人类方面	と も い 共に生きる 共生	か ん け い 関係 关系	

课文 2:

人类和人工智能和创造性

人工智能的开发者以将智能装进电脑和机器人等人工产物为目标，日益发奋研究。

在人类所知的范围内，人才是拥有最高智能的存在。所以人工智能的目标是具有像人一样的智能。人会做“各种各样”的事，比如使用语言和理解语言（相当于人工智能的“自然语言处理”领域），认知用眼睛看到的東西（相当于人工智能的“画像认知”），理解用耳朵听到的声音（相当于人工智能的“声音认知”）。人的智能是將这些能力归为一体的能力。人工智能的研究想把这些“各种各样”的能力输入电脑。

我很想通过以往的研究来了解“什么是人类？什么是人类的智慧？”，特别是关于人工智能和创造性之间的关系。那么什么是创造性呢？它是发明新事物的能力。不但画家或作家等特殊职业的人具有这种能力，一般的人也同样具有这种能力。能画画或写文章，这些都是创造力给予我们的能力。

大家一定知道“星新一”这位作家吧。他写了很多幽默而且带有哲理性的短篇小说。我近年和研究他的学者一起尝试让电脑写“星新一风格”的作品。我们的梦

想是写（造）出能够获得文学奖的作品，但是现在还停留在通过第一次评委的阶段。今后的路还很漫长。

但是在让电脑写小说的研究中，我们明白了几件事。

刚才我提到创造力是一种发现新事物的能力。如果只是发现当下没有的事物，电脑比人更擅长这些。我们通过研究证实电脑可以 1 个小时写出十万部小说。不过这些小说的内容都很相似，读起来也没意思。但表面上看是不同的作品。人的作家不管写得多么快也没有这般速度。

此外，人的思维虽然可以自由地去想象，但是难免发生某种倾向。会受到自身的教养和积累的经验所影响。凭这一点，电脑善于创造大量全面性的产物。例如让人和电脑同时书写不同的数字，人书写的数字会出现习惯性和个人喜好，但是电脑书写数字的出现频率保持安定性。

相反，对于电脑来说在很多作品中挑选优秀作品是一件很难的事情。在此我们再次对人类的创造性进行一下评论，有很多时候想出的新办法并不一定被采用。因为自己以为是新的想法，但往往有谁已经在实行，有时对于他人来说没有任何意义。人们在这些想法中无意识地去选择有可能性的或更好的那一个。在众多候选中寻找更好的这个行为被称作“评价”，人类伟大的创造力是以这个“评价部分”为基础的。什么是好，什么有意思，电脑很难做出此类的评价。

我觉得在这里存在着思考人类与人工智能的关系时人类应该起到的作用。人类和电脑擅长的领域不同，所以应该各自担当自己擅长的领域，共同完成一事物。例如在做富有创造性的活动时，可以让电脑去担任找到很多建议的部分，然后让人担任评价这些，再具体将工作完成。这在有限的时间内完成一定水平以上的工作时，一定能提高不少生产性。另外人类与人工智能如果可以协力创造的话，也许能产生新的价值。

人工智能在不断地进步。但是人类同样拥有电脑难以做到的擅长的事情。今后电脑可能会做出更多的候选，因此人类必须提高自己评价的能力。为了做出适当的评价，我们要积累各种经验，拥有各方面的知识，还要培养判断是非的能力。这些才是新时代必备的能力。

汉字

じんこうちのう 人工知能 人工智能	にんげん 人間 人类	そうぞうせい 創造性 创造性	けんきゅう 研究 研究	はんい 範囲 范围	こうど 高度 高度
じしん 自身 自己	たと 例えば 例如	ことば 言葉 语言	りかい 理解 理解	しぜんげんご 自然言語 自然语言	しより 処理 处理
りょういき 領域 领域	がぞうにんしき 画像認識 画像认知	おんせい 音声 声音	のうりょく 能力 能力	かんけい 関係 关系	かさ 重ねる 积累
が か 画家 画家	さつ か 作家 作家	とくてい 特定 特定	え か 絵を描く 画画	ぶんしょう 文章 文章	たまもの 賜物 礼物
きんねん 近年 近年	こころ 試 み 尝试	ぶんがくしょう 文学賞 文学奖	にゅうしょう 入 賞 入选	しんさ 審査 评委	つうか 通過 通过
だんかい 段階 阶段	すす 進める 进行	とくい 得意 擅长	われわれ 我々 我们	かのう 可能 可能	に よ 似寄る 相近
ひょうめん 表面 表面	こと 異なる 不同	さくひん 作品 作品	はや 速く 快	じゆう 自由 自由	はっそう 発想 想法
かたよ 偏 り 偏于	ちし き 知識 知识	けいけん 経験 经验	えいきょう 影 響 影响	う だ 生み出す 产生	すうじ 数字 数字
さぎょう 作業 工作	おちい 陥 る 陷于	ひと 等しい 等于	しゅつげんひんど 出現頻度 出现频率	すぐ 優れる 更好	えら 選ぶ 选择
ばあい 場合 时候	すで 既に 已经	まった 全 く 完全	む い し き 無意識 无意识	こうほ 候補 候选	み こ 見込み 有希望
ひょうか 評価 评价	ぶぶん 部分 部分	もと 基づく 基于	ひつよう 必要 需要	はたす 果たす 完成	やくわり 役割 作用

ぶんたん 分担	きょうどう 共同	ものごと 物事	あ 当たる	かつどう 活動	ぐたいてき 具体的
分担	共同	事物	等于	活动	具体的
かんせいひん 完成品	かぎ 限られる	じかんない 時間内	いっていすいじゅん 一定水準	いじょう 以上	い み 意味
成品	有限	时间里	一定水平	以上	意思
せいさんせい 生産性	きょうりょく 協力	か ち 価値	しんぽ 進歩	に がて 苦手	い ぜん 依然
生产性能	协力	价值	进步	不善于	依然
のこ 残る	の 伸ばす	てきせつ 適切	つ 積む	やしな 養 う	たいせつ 大切
留下	延迟	适当	积累	养育	重要

P134 汉字练习

① ^{かつしよく}褐色の^{だいち}大地が^{ひろがる}広がる。

^{こはん}湖畔で^え絵を^{かく}描く

ろうそくの^{ほのお}炎が^{かぜ}風に^{ゆれる}揺れる

^{せきついでうぶつ}脊椎動物の^{とくちょう}特徴を^{まなぶ}学ぶ

^{あねったい}亜熱帯の^{しょくぶつ}植物に^{きょうみ}興味を持^もつ

この^{さかみち}坂道は^{こうばい}勾配が^{きゅう}急だ。

② ^{せんかい}旋回・^{えいしょう}詠唱 ^{さんろく}山麓・^{かんきゅう}緩急 ^{さちぎょう}吉凶・^{くはい}苦杯 ^{ぼきん}募金・^{ぞうへい}造幣

③ ^{きょうしゅう}郷愁 ^{あいとう}哀悼 ^{たいだ}怠惰 ^{せんりつ}戦慄

④ ^{しゅび・こもり}守備/子守り ^{せいえん・せいしよく}声援/声色 ^{しんしつ・いわむろ}寝室/岩室 ^{じびか・はなうた}耳鼻科/鼻歌 ^{めいろ・まよう}迷路/迷う

詩：初恋^{はつこい}

作者：島崎藤村^{しまざきとうそん}（1872-1943）出身于岐阜县。诗人，小说家。善于将青春的感性用七言或五言的文言文来表达，为近代诗打下基础。诗集有《若菜集》《落梅集》。小说有《破戒》《春》《黎明前》等。

『初恋^{はつこい}』

まだあげ初^{はじ}めし前^{まえがみ}髪^{かみ}の

りんご^{りんご}林^{りん}檣^ごのもとに見^みえしとき

まえ^{まえ}前にさしたる花^{はな}櫛^{くし}の

はな^{はな}花^{はな}ある君^{きみ}と思^{おも}ひけり

やさしく白^{しろ}き手^てをのべて

りんご^{りんご}林^{りん}檣^ごをわれにあたへしは

うすくれない^{うすくれない}薄^{あさ}紅^みの秋^{あき}の實^みに

人こひ初^{はじ}めしはじめなり
わがこゝろなきためいきの

その髪^{かみ}の毛^けにかゝるとき

たのしき戀^{こい}の盃^{さかずき}を

きみ^{きみ}が情^{なさけ}に酌^くみしかな

りんご^{りんご}ばたけ^こ林^{りん}檣^ご 畠^{はたけ}の樹^この下^{した}に

おのづからなる細^{ほそみち}道^{みち}は

た^た誰^たがふみそめしかたみぞと

中译：

初恋

在苹果树下
看着你刚刚挽起的头发
插在鬓前的花梳子
有着和你同样的美丽

你温柔地伸出一只雪白的手
递给我的那只苹果
是秋季浅红色的果实
就是在此刻我开始迷恋你

是我的一声叹息
让你的前发微动
恋爱中的美酒这般醉人
是因为你接受了我的爱

在果园的苹果树下
你天真地问我这条小路
是谁和谁走出来的？
让我更觉得你是多么可爱



参考資料:

島崎藤村「初恋」の現代語訳

一

まだ結^ゆいあげたばかりの君の前髪が

(少女のまだ幼さが残る様子を表している)

林檎の樹の下に見えた。

前髪に刺している花模様の櫛

君はまるでその花のように美しいと思った

(君の前髪に花が咲いているようだったと思った、という解釈もある)

二

白い手をやさしくこちらに伸ばして

林檎を僕にくれたね。

薄紅の秋の実(林檎のこと)に

そのとき僕は恋をしたんだ

(つまり、「君に恋をした」という意味)

三

僕がふと もらしたためいきが

君の髪にかかった。

(ためいきがかかるといふ距離が縮まっている)

君が僕の恋心を受け入れてくれたから

(恋が実ったという意味)

こんなに楽しい恋の酒に酔いしれることができるんだ

四

林檎畠の樹の下に

自然に出来たこの細道のことを

(二人がいつもここに会いにやっていたからできた道)

どうしてこの道が出来たの?? と

(わかっていて、わざと聞いている)

僕に聞く君のことがまた恋しいと思うんだ

(いたずらっぽい少女を、また愛おしく思っている)

6. 继承往昔的精神

阅读的时候要想象作品的背景，将古典的精髓运用于现代。

P144 和歌的世界

开在原野的花朵，飘动的白云，无论是古代还是现代，人们都试图用语言来表达被打动的事物。这些珠玉之作打动了读者的心。人们想象和歌中的情感，评论往昔的故事。

(1) 万叶集

万叶集是现在日本留下的歌集中最古老的一部。共有 20 卷，收录了大约 4500 首和歌。其中大力歌颂了天皇和贵族以及兵士和农民等广泛阶层人物的感动。在漫长的岁月它经多人之手，直到奈良时代的末期经过“大伴家持”的编辑才以现在的形式保留下来。

(2) 古今和歌集

平安时代初期，在醍醐天皇的命令下编成的第一本“御选和歌集”（在天皇或上皇以及法皇的命令下编辑的和歌集）共 20 卷。在编辑上大约有千百首和歌按照春夏秋冬和恋爱等整齐分类。在表达上富有技巧，细腻优美的短歌为数众多。编者有“纪贯之，凡河内躬恒，纪友则，壬生忠岑”。

(3) 新古今和歌集

镰仓时代初期在“后鸟羽天皇”的命令下编辑成的第八本“御选和歌集”。共 20 卷，收纳了大约 1 千 9 百 80 首和歌。特点是描写自然美和细腻情感的短歌为数众多。编者有“藤原有家，藤原定家，藤原家隆，藤原雅经，源通具，寂莲法师”。

P146 朗读《古今和歌集》的序文

和歌作为人们心里的种子萌发出各式各样的枝叶。活在世上的人会遇到形形色色的事物，和歌将心中的想法和看到的事物以及听到的一切用诗的形式表达。听到花卉中啼叫的黄莺和住在清流的河鹿鸣叫，我们会情不自禁地将所有生物用诗来歌颂。和歌可以轻松地打动天地之神的心，也能让肉眼看不到的诸位精灵感动，能使男女更加亲密，使勇猛的武士那颗心变得和平温柔。

P148 阅读万叶，古今，新古今诗集的和歌

目的：

理解创作状况和背景，走进和歌的世界。

读解作者的心理和描写的情景，考虑它的表达效果。

文章の読み解きマナペディアトップ <https://manapedia.jp/text/1788>



万叶诗集的和歌

（原文/持統天皇）

春過ぎて 夏きたるらし 白妙の 衣ほしたり 天の香具山

（読み）

はるすぎて なつきたるらし しろたへの ころもほしたり あまのかぐやま

（現代語訳）

春が過ぎて夏がやって来たようです。真っ白な衣が干してありますね。天の香具山に。

（中译）

春天已过去 夏季又来到这里 仙女将她的纱衣 高高挂在香具山顶

（柿本人麻呂）東の 野に炎の 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ

ひむがし(ひむかし)の のにかぎろひの たつみえて かへりみすれば つき
かたぶきぬ

東方の野に日の出前の光が射し始めるのが見えて、後ろを振り返って（西の方角を）見てみると、月が傾いていた。

渐渐看到 东方的原野上 高高地升起太阳 回过头来又看到 月儿挂在另一方

あ を わ やど すだれ
(額田王) 君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸の 簾 動かし秋の風吹く

あなたを待って私が恋しく思っていると、私の部屋のすだれを動かして秋の風が吹いていきます。

等待你的到来 思念之情令我不安 突然房间的门帘 微微动了一下 是你吗还是秋风？

(山部赤人) 天地の分れし時ゆ 神さびて 高く貴き駿河なる

富士の高嶺を 天の原振りさけ見れば 渡る日の 影も隠らひ

照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくそ
雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は

天と地の分かれたときから、神々しく高く貴い、駿河の国にある富士山の高嶺を、大空はるかに振り仰いで見ると、空を渡る太陽も隠れて、夜空に照る月の光も見えない。白雲も富士に行く手を阻まれて、いつでも雪が降り積もっている。後世の人たちにも語り伝え、語り継いで行こう、この富士山のことを。

自天地分开之后，仰望骏河之国富士山顶峰的上空，是那么神圣那么高雅，太阳在天空升起又落下，然后隐藏起来，看不到夜空笼罩的月光。就连白云也伸手挡住富士的脚步，让雪下个不停积得很高。让我们讲给后世的人们，世世代代不要忘记富士山的故事。

反歌（和歌の長歌のあとにつけ加えられた短歌）

田子の浦ゆ うち出でてみれば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける
たごのうらゆ うちいでてみれば ましろに そふじのたかねに ゆきはふりける
田子の浦を通過（視界の開けたところまで）出て見ると、真っ白に、富士山の高いところに雪が降り積もっていることだよ。

走过骏河湾的沿岸，来到视野宽阔的地方。啊！富士山顶积起雪白的冬雪。

（山上憶良）憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つらむそ
おくららは いまはまからむ こなくらむ それそのははも われをまつらむそ
憶良めはもうおいとまいたしましょう。（家で）子が泣いているでしょうし、そ
れにほら、その母（私の妻）も私を待っているでしょうよ。
憶良说“我们该告辞了”。孩子在家哭呢！还有孩子他妈（我的爱妻）在等我回家。

（作者不明/東国を詠んだ歌ことを東歌（あずまうた）。）
多摩川に さらす手作り さらにに 何そこの児の ここだかなしき
たまがはに さらにてづくり さらにに なにそこのこの ここだかなしき
多摩川にさらしている手作りの布のように、ますます、なんでこの子はこんな
にも愛おしいのだろうか
像似多摩川手洗的布条，我的孩子为什么这么水灵可爱！？



（防人歌/防人（さきもり）とは、飛鳥時代から平安時代の間に課す税の1つ）
父母が頭かきなで幸くあれて 言ひし言葉ぜ忘れかねつる
ちちははが かしらかきなで さくあれて いひしけとばぜ わすれかねつる
父母が私の頭をなでながら口にした、「達者でなさいね」という言葉が頭から忘
れられないのです。
我的脑海里总是浮现出，父亲和母亲一边摸着我的头一边说的那句话：“多保重”。

（大伴家持）新^{あらた}しき年の初めの初春の 今日降る雪のいやしけ吉事^{よごと}
新しい年の初め、初春の今日降る雪のように、良い事もたくさん積もれ
希望新年的开始，能和今天下的初春的雪一样，事事大吉平安无事。

古今诗集的和歌

百人一首 <https://news.mynavi.jp/article/20240109-2859429/>

（紀貫之）人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香ににほひける
ひとはいさ こころもしらず ふるさとは はなぞむかしの かににほ（お）ひ
（い）ける

あなたの心は、さあ、どうだかわかりません。

でも、昔なじみのこの場所の梅の花は、昔と変わらない香りで咲いていますね。

你的心在哪我不知道 但是一起去过的那个梅林 花儿开得和过去一样美丽

（藤原敏行）秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞおどろかれぬる
あききぬとめにはさやかに見えねども かぜのおとにぞおどろかれぬる

（立秋の日になっても）秋が来たと、はっきりと目にはみえないけれど、風の音で（秋の到来に）はっと気づきました。

立秋以后还不能完全感到秋季已经到来 直到一阵风吹过才感到秋天送来的信息

（小野小町）思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを
おもひつつ ぬればやひとの みえつらむ ゆめとしりせば さめざらましを
思いながら眠りについたので、（あの人）が夢に現れたのだろうか。もし夢とわかっていたら（夢から）覚めなかったろうに。

因为想着他就睡着了 在梦里是否能见到？ 虽然知道是一场梦 但愿不要醒

新古今诗集的和歌

（西行法師）道の辺に清水流るる柳陰 しばしとてこそ立ちどまりつれ
みちのべに しみずながるる やなぎかげ しばしとてこそ たちどまりつれ
道中で、清水が流れ出ている柳の小陰があった。少しそこで休もうと思ったら、あまりにも心地がよくて長居をしてしまったよ。

途中走到清水流淌的柳树阴下 决定休息片刻 但因为太适意不知不觉呆了很久

（藤原定家）見渡せば花も紅葉もなかりけり 浦の苫屋の秋の夕暮
 みわたせば はなももみじも なかりけり うらのとまやの あきのゆうぐれ
 見渡してみると、春の美しい花も秋の紅葉も（ここには）ないことよ。海辺の苫
 ぶきの粗末な小屋のあたりの秋の夕暮れよ。
 环视四周，虽然没有春天美丽的花朵，也没有秋季火红的枫叶，但海边的稻草屋衬
 托在秋季的夕阳下。

（式子内親王）玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶことの弱りもぞする
 たまのをよ たえなばたえね ながらへば しのぶことの よわりもぞする
 （私の）命よ、絶えるのならば絶えてしまえ。このまま長く生きていれば、耐え
 忍ぶ力が弱って（心に秘めた恋がばれて）しまいそうだから。
 但愿生命之火可烧尽 如果这样活下去 一定不能忍受爱你的这颗心被人看破。

P154 夏草

——节选自《深处的小路》——



目的：注意历史背景，着眼体会表达方式和问题的特点。

理解文章中作者对事物的看法和感受方式。

作者：

松尾芭蕉出生于 1644-1694 年。三重县伊贺市出身，是江户时代前期的诗人。本名宗房。30 岁左右来到江户（现东京）作为俳句诗人登上旅程，以高水品的艺术性创立了芭蕉派诗歌。散文有《原野纪行》《笈（背箱）小文》《嵯峨日记》等。

出典：《深处的小路》

有代表性的日本纪行文之一。松尾芭蕉自元禄二年（1689 年）3 月从江户出发，经过奥羽和北陆到达美浓国（现在的岐阜县大垣）期间行程 2400 公里。芭蕉将花费了 150 天的旅程和经验用见闻的形式记录下来。原文来自《新编日本古典文学全集 71》的《松尾芭蕉 2》。

P154

<原文>

おくのほそ道 松尾芭蕉 （現代仮名遣い、読み仮名付版）

はくたい かかく ゆきか またたびびとなり
月日は 百 代の 過 客 にして、行 交 う年も 又 旅 人 也 。

ふね しょうがい おい もの
舟 の上に 生 涯 をうかべ、馬の口とらえて 老 をむかうる 物 は、

ひびたび すみか こじん よ
日々 旅 にして旅を 栖 とす。古 人 も多く旅に死せるあり。 予 もいず

へんうん ひょうはく
れの年よりか、片 雲 の風にさそわれて、 漂 泊 の思いやまず。

かいひん こぞ あきこうしょう はおく くも ふるす
海 浜 にさすらえ、去年の 秋 江 上 の破 屋 に 蜘蛛 の古 巢 をは

くれ はるたて かすみ そら しらかわ せきこ
らいて、やゝ年も 暮 、春 立 る霞の 空 に 白 川 の 関 越えんと、

がみ どうそじん とる
そぞろ神の物につきて心をくるわせ、道 祖 神 のまねきにあいて、取 もの

手につかず。もゝひきの ^{やぶれ}破 をつゞり、 ^{かさ}笠 の ^{おつけ}緒 付 かえて、 ^{さんり}三里 に
^{きゅう}灸 ^{まつしま}すゆるより、 ^{つきます}松 嶋 の 月 先 ^{すめ}心にかゝりて、 ^{かた}住 る方は人に ^{ゆず}譲
^{さんぷう}り、 ^{べっしょ}杉 風 が 別 墅 に移るに、
^{くさ}草 の ^と戸も ^{すみかわ}住 替 ^よる代ぞひなの家
おもてはつく いおり はしら かけおく
面 八 句を 庵 の 柱 に 懸 置 。

夏草/白話文

月日は百代にわたって旅を続けて行くものであり、来ては去り去っては来る年々も、また同じように旅人である。

舟の上に身を浮かべて一生を送り、旅人や荷物を乗せる馬をひいて生涯を過ごし、老年を迎える者は、日々が旅であって、旅そのものを常のすみかとしている。風雅の道の古人たちも、たくさん旅中に死んでいる。

わたくしもいつのころからか、ちぎれ雲を吹きとばす風にそぞろ誘われて、漂泊の思いが止まず、この年ごろは、海のあたりをさまよい歩き、昨年の秋、隅田川のほとりの破れ家にもどり、蜘蛛の古巣を払って久しぶりの住まいにようやく年も暮れたのだった。

が、新しい年ともなれば、立春の霞こめる空のもとに白川の関を越えたいと願い、そぞろ神にとりつかれて物狂おしく、道祖神の旅へ出てこいという招きにあって、取るものも手につかない。股（もも）引きの破れをつづくり、笠の緒をつけかえて、三里に灸をすえると、もう心はいつか旅の上一松島の月の美しさと、そんなことが気になるばかりで、二度と帰れるかどうかもわからない旅であるから、いままで住んでいた芭蕉庵は人に譲り、杉風（さんぷう）の別荘に移ったところ、

草の戸も住替る代ぞひなの家
（わびしい草庵も自分の次の住人がもう代わり住んで、
時も雛祭のころ、さすがに自分のような世捨人とは異なり、雛を飾った家になっていることよ）

と詠んで、この句を発句にして、面八句をつらね、庵の柱に掛けておいた。



中译：

岁月即使过去百代，旅客依然继续旅行，一年过去了，又有新的一年到来，日复一日，年复一年，旅客同样徒步在旅途中。

渔夫终生漂泊在海上，旅客牵着背上载着行李的马儿度过一生，即使到了晚年同样过着旅行的日子，旅行就是他们所谓的人生。古人在此风雅之道，很多人将骨灰洒在旅途。

我也一样，不知从何时开始看到被风吹动的浮云，就不由得产生漂泊之念。今年徘徊在海岸，去年秋季回到隅田河边破旧的家中，打扫挂满蜘蛛的门前，想起已经很久没有回来过年了。

但是迎接了新年马上就开始想怎样越过立春晚霞中的白川关口（福岛县）。简直像着了迷一样被“道祖神”（保佑交通安全的神）所引诱，恨不得马上就上路。于是缝好破旧的衬裤，换好草帽上的绳带，针灸腿上的三里穴时，我的心已经上路梦想着松岛（宫城县/日本三景）的明月之美。知道也许下次是再也回不来的旅行，所以将至今住过的“芭蕉庵”让给他人，搬到杉风的别墅。写下以下诗句挂在墙上：

くさ^との戸も 住^{じゅう}替^{かわ}る代^{だい}ぞひ^いなの家

“草屋已换人 正值初春桃花节 已否饰人偶”



＜原文＞（現代仮名遣い、読み仮名付版）

三代の栄耀（えいよう）一睡（いっすい）の中（うち）にして、大門（だいもん）の跡は一里こなたに有（あり）。秀衡（ひでひら）が跡は田野（でんや）に成（なり）て、金鷄山（きんけいざん）のみ形（かたち）を残す。先（まず）、高館（たかだち）にのぼれば、北上川（きたかみがわ）南部より流るゝ大河（たいが）也（なり）。衣川（ころもがわ）は、和泉（いずみ）が城（じょう）をめぐりて、高館の下にて大河に落入（おちいる）。泰衡等（やすひらら）が旧跡は、衣（ころも）が関（せき）を隔て、南部口をさし堅（かた）め、夷（えぞ）をふせぐとみえたり。偕（さて）も義臣（ぎしん）すぐつて此（この）城にこもり、功名（こうみょう）一時（いちじ）の叢（くさむら）となる。国破れて山河あり、城（しろ）春にして草青みたりと、笠（かさ）打敷（うちしき）て、時のうつるまで泪（なみだ）を落（おと）し侍（はべ）りぬ。

夏草や兵（つわもの）どもが夢の跡

卯（う）の花に兼房（かねふさ）みゆる白毛（しらが）かな 曾良（そら）

兼（かね）て耳驚（おどろか）したる二堂開帳（かいちょう）す。経堂（きょうどう）は三将の像をのこし、光堂（ひかりどう）は三代の棺（ひつぎ）を納め、三尊（さんぞん）の仏を安置す。七宝（しっぽう）散（ちり）うせて、珠（たま）の扉（とびら）風にやぶれ、金（こがね）の柱霜雪（そうせつ）に朽（くち）て、既（すでに）頽廃（たいはい）空虚の叢と成（なる）べきを、四面（しめん）新（あらた）に圀（かこみ）て、薨（いらか）を覆（おおい）て雨風（ふうふう）を凌（しのぐ）。暫時（しばらく）千歳（せんざい）の記念（かたみ）とはなれり。五月雨（さみだれ）の降（ふり）のこしてや光堂

現代語訳

- ① 〔奥州藤原氏の〕三代の栄華も一瞬の夢のあいだのようであって、〔平泉館の〕大門の跡は一里手前にある。
- ② 秀衡の館の跡は田や野原になって、金鷄山だけが昔の形をとどめている。
- ③ まず〔源義経の館であった〕高館にのぼると、北上川は南部地方から流れてくる大河である。
- ④ 衣川は和泉が城を巡って流れ、高館の下で大河（＝北上川）に流れ込んでいく。
- ⑤ 泰衡たちの旧跡は、衣が関を間にはさんで南部地方からの入り口を固めて、

夷〔の侵入〕を防いだものと思われる。

- ⑥ それにしても、〔義経は〕忠実な家臣を選んでこの城（＝高館）に立てこもり〔戦ったが〕、〔その〕功名も一時のもので〔今は〕草むらとなっている。
- ⑦ 「国は荒廃しても山河は〔昔と変わらずに〕残り、〔廃墟となった〕城も〔今では〕草が青々と茂っている。」と〔杜甫の漢詩を思い出して〕、
- ⑧ 笠を敷いて〔座り〕、時が過ぎるまで涙を流しました。
- ⑨ 一面に草がぼうぼうと生い茂っている。昔武士たちが立てた功名も、今では夢のようにはなく消えてしまった。
- ⑩ 卯の花が白く咲いているのを見ると、義経の家臣の兼房が白髪をふり乱して戦った姿が浮かぶことよ。 曾良以前から噂に聞いて驚いていた二堂（＝中尊寺の経堂と金堂）が開帳されている。
- ⑪ 経堂には〔奥州藤原氏の清衡・基衡・秀衡の〕三代の將軍の像を残しており、光堂は〔これら〕三代の棺を納め、阿弥陀三尊の仏を安置している。
- ⑫ 〔光堂を飾っていた〕七宝は消失して、珠玉をちりばめた扉は風に敗れ、金箔の柱は霜や雪で朽ちて、
- ⑬ とっくに崩れ落ちてなにもない草むらになるはずであったのに、
- ⑭ 〔光堂の周りの〕四面を新しく囲んで、屋根で覆って風雨を防いでいる。
- ⑮ 〔ここ〕しばらくは遠い昔のをしのぶ記念物となっている。
- ⑯ 〔すべてを古びさせる〕五月雨も、ここだけは降らなかったのだろうか。〔今もなお昔と同じように燦然と輝いている〕光堂よ

中译:

- ① 奥州藤原氏三代榮耀也在一瞬间破灭，平泉馆的大门古迹留在距离一里（500米）之处。
- ② 秀衡馆已消失在田野没有了踪迹，只有金鸡山依旧立在那里。
- ③ 首先登上旧“源义经馆”的高楼，就能俯视从南部地方流过的大河（北上川）
- ④ 衣川环绕“和泉城”流淌，在高楼下与大河（＝北上川）会合。
- ⑤ 泰衡的旧跡之间夹着“衣关”，成为南部地方的入口，以防御夷人的侵入。
- ⑥ 可想而知，義経（平安时代末期-鎌倉时代初期的日本武将）是挑选了忠实自己的家臣勇敢作战，守护了城堡（＝高楼），但是此功名也是一时的，现今已荒废于荒草之间。
- ⑦ 让人想起杜甫的诗：“国破山河在，城春草木深——”
- ⑧ 于是摘下草帽坐下来，见景生情地流下泪来。



春望 杜甫
國破山河在
城春草木深
感時花濺淚
恨別鳥驚心
烽火連三月
家書抵萬金
白頭搔更短
渾欲不勝簪

- ⑨ 周围长着一片茂密的野草。过去武士们赢得的功名，如今象虚幻的梦一样消失得没有踪影。
- ⑩ 看到雪白的水晶花，脑海中浮现出“义经”的家臣“兼房”披着凌乱的白发奋战的样子。曾良以前在传说中听到的二堂（＝中尊寺的经堂和金堂）竟对外公开。
- ⑪ 经堂里保留着〔奥州藤原氏清衡・基衡・秀衡〕三代将军的雕像，光堂收纳了三代将军的棺材，并安置着阿弥陀三尊的佛像。
- ⑫ 但是装饰在光堂的七宝（金輪宝・白象宝・紺馬宝・神珠宝・玉女宝・居士宝・主兵宝）已经消失，镶嵌珠玉的门窗被风刮破，金箔的柱子被霜雪侵蚀
- ⑬ 早已经倒塌的院落本应归为草坪
- ⑭ 但是〔光堂〕四面却被从新围起，用房檐来遮挡风雨。
- ⑮ 这里近来成为怀念过去的纪念物。
- ⑯ 可以侵蚀一切的五月雨竟然没有在这里下过吗？现在的光堂竟然和以前一样辉煌灿烂！



国政七宝；相传是[古印度](#)转轮圣王治理国家不可缺少的[武器](#)

7. 创造价值

在人与人的关系中创造新的价值

课文：替代（帮助）别人的意义

目标：在阅读时要注意表达抽象概念的语句在文脉中的意思。
理解笔者的思维方式和思想，要对社会 and 人类持有自己的意见。

作者：鷺田清一

出生于 1949 年，京都府出身。哲学家。作品有《听的作用-临床哲学试论》，《自己/这个不可思议的存在》，《易懂也是难懂？临床哲学讲座》等。本文为中学教材而写。



汉字

のうりよく 能力 能力	さいのう 才能 才能	てつがくしゃ 哲学者 哲学家	し そう か 思想家 思想家	く かえ 繰り返す 重复	わかもの 若者 年轻人
せだい 世代 世代	こ 超える 超过	じだい 時代 时代	り ゆう 理由 理由	こじん 個人 个人	じ ゆう 自由 自由
ほしょう 保障 保障	しゃかい 社会 社会	い し 意志 意志	えら と 選ぶ取る 选取	り そう 理想 理想	かのうせい 可能性 可能性
むかし 昔 过去	ほうけんせい 封建制 封建制	きび 厳しい 严格	せいげん 制限 限制	い こ こ ち 居心地 舒适度	うらがえ 裏返す 相反

そんざい か ち 存在価値 存在价值	な 成し 遂げる 成功	う 生み 出す 创造出	はか 測る 測量	た 絶えず 不断	と 問われる 被问
どうじ 同時 同时	か 代わり 替代	そんざい 存在 存在	しょうめい 証明 证明	じょうきょう 状 況 状况	せつ 切ない 难过
か 変える 改变	ちよくめん 直 面 面对	みと 認める 承认	むじょうけん 無条件 无条件	こうてい・ひてい 肯定/否定 肯定/否定	いた 痛い 疼痛
ねが 願う 希望	ひつよう 必要 必要	こわ 怖い 可怕	いっさい 一切 全都	し ぜん 自然 自然	な 成り 行き 结果
あや 危うい 险些	たしや 他者 他者	よこ 横 旁边	ふ あん・あんしん 不安/安心 不安/安心	い み 意味 意思	つね 常に 经常
あた 与える 给与	う 受け身 被动	かんしん 関心 关心	いぞんしょう 依存症 依赖性	おちい 陥 る 陷入	み ま 見舞われる 遭到
くろう 苦劳 劳苦	こんなん 困難 困难	かいけつ 解決 解决	ひつよう 必要 必要	じりつ 自立 自立	どくりつ 独立 独立
じょうたい 状 態 状态	ご かい 誤解 误解	ひと 独り 单独	しょくざい 食 材 食材	じゅんび 準備 准备	かんびょう 看 病 看病
てがみ 手紙 书信	とど 届ける 送	でんしゃ 電車 电车	うんてん 運 転 开车	しゅうり 修理 修理	かぞ 数え 切れる 数不尽
く 暮らし 生活	こうどう 行 動 行动	ささ あ 支 え 合 う 互相支持	とら 捉える 认为	そうご 相 互 相互	あじ 味わう 体会
びょうき 病氣 生病	じ こ 事 故 事故	さいがい 災 害 灾害	どくりよく 独 力 独力	た にん 他 人 别人	ほんとう 本 当 真的
かか こ 抱 え 込 む 持有	い か 言 い 換 え る 换句话说	じじょう 事 情 情况	き も 氣 持 ち 心情	がわ 側 边/方	ようい 用 意 准备

いしき 意識 意识	せきにん お 責任を負う 负责	ほんらい 本来 本来	こた 応える 回应	たす 助ける 帮助	うった 訴え 控诉
よびかけ 呼吁 呼吁	か 課せる 交付	う み 受け身 被动	さいご 最後 最后	しっぱい 失敗 失败	きょうどう 協同 一同协助
かんかく 感覚 感觉	そこ 底 底下	きほん 基本 基本	あつ 集まり 聚集	さ 避ける 回避	めんじょ 免除 免除
はたら 働く 工作	むり 無理 难以	しくみ 仕組み 构造	かくとう 格闘 格斗	まか 任せる 任凭	むりよく 無力 无力
こくふく 克服 克服	しんがくしゃ 神学者 神学家	ことば 言葉 语言	う 埋もれる 埋没	せ お 背負い 背负	ぼうとう 冒頭 开头
あ 挙げる 举例	と 問う 提问	さが だ 探し出す 找出	かかわ 関り 有关	ぐたいてき 具体的 具体的	う 浮かび上がる 浮现
よわさ 弱さ 软弱	おぎな 補い 弥补	たお 倒れる 倒下	よりよく 余力 余力	もと 求める 谋求	さいご 最後 最后
じゅうだい ころ 十代の頃 10几岁时	あいどく 愛読 爱读	ちょしょ 著書 著作	しょうかい 紹介 介绍	にんげん 人間 人类	あらわ 現れる 出现

课文：

《替代（帮助）别人的意义》

“只有自己才有的东西是什么？”

“自己有哪些他人没有的能力和才能？”

这些你都想过吗？

类似“自己是什么存在”的问题，从古至今经过哲学家和思想家的研究已久。但是现在不仅是哲学家和思想家，就连10几岁的年轻人，直到中老年，超越了年代的界限，到了人人都想问的时代。

为什么这样说呢。现今的社会与以往的时代相比，可以说个人的自由受到社会最大限度的保障。按照自己的意志来选择自己的人生是这个社会的理想形式。社会允许你选择各种职业。以往的封建制社会，个人自由受到社会的严格限制，相比之下现在可以说是一个相当舒适的社会。但是正因为有了完全的自由，同时也有了烦恼。

可以有各种选择的社会。将它换一种说法，就是人的存在价值可以用此人的成功和创造的价值来衡量。社会衡量价值的标准是：“他做了什么？”“能做什么？”如果不断地被他人问：“你能做什么？”“只有你才能做的事是什么？”，我们会情不自禁地自问：“我有他人做不到的能力和才能吗？”

为了不被人说“这件事你不做，别人也可以做”“你的位置谁都可以代替”，我们就要去证明自己是不可代替的存在。在这种状况下，前文提到的“自己是什么存在”这样的问题，有可能会变成“这样的我应该存在吗？”。这个转变是很残酷的。

当直视这个问题的时候，我们会从苦恼中寻求承认现在的自我，无条件的肯定。痛苦地去期望即使什么都做不到的自己也能被别人肯定。没有什么比被别人说：“有你没你都一样”，自己的存在不被任何人需要这件事更屈辱更可怕的了。所以，我们自然会去寻求，不以“能/不能”为条件承认自己的存在，对我们说：“喜欢现在的你”的人。

但这又是很危险的事。因为这样的话，如果说“喜欢现在的你”的人不总在我们身边就会变得不安，会不断希望别人给与自己存在的意义和理由，处于一个被动的状态。需要别人不断地关心自己，如果那个人不在就什么都不会做……陷于极其依赖的症状。

如果处于这种被动的状态，人生遇到的各种辛劳和困难，面对的各种社会问题可能都得不到解决。因此，我们还是需要接受和面对这些的“勇气”。这里提到的勇气在现今社会被称为“自立”。在这里我们不要误解“自立”和“独立”的意思。“独立”在英语里是“independence”，在具有依赖意思的“dependence”的前边加表示否定的“in”，意味着不依赖谁的状态。

但是，我们活着不可能谁都不依赖。为我们准备食材的人，有病时护理我们的人，为我们送信的人，为我们开电车修理车的人。社会上有无数人在生活上相互支撑对方的生活和行动。也许有人会说：“有钱能使鬼推磨”，但是想一想如果没有可

以使用的石磨（社会体系），没有支撑这个体系的人，有钱也没有用的地方。

所以“自立”不是否定“依赖”的“independence”（独立），而是在“依赖”的前边加了一个有“互相”意思的“inter”，也就是应该把它理解成“interdependence”（互助）。如果突然生病或者遇到事故和灾害不能单独行动的时候，就需要使用与他人互助的现存体系，这才是“自立”的真正意义。也可以说不需要一个人完全去面对困难。当然，因为有“互助体系”，自己也要在一定时期和一定情况下随时做好帮助别人的精神准备。也就是“代替（帮助）别人”的意识。

我想这也许就是“负责”的本意。责任在英语里是“responsibility”。也是“respond”（应对）和“ability”（能力）的合成语。意思是在别人“求救”的时候要有可以应对的准备。日语里的“责任”带有强加和被勉强的负面意思。但是我认为“责任”并不是要一个人背负到最后，也不应该总是在失败的时候被指责的对象。相反，“责任”是相互应对求救和呼吁，具有协同的感觉。遇到困难的时候，心底会有种安全感，周围的人会说：“做不到也没关系，有谁会代替你做”。这是一种应该成为社会基础的感觉。

在人与人群中都会有各种劳苦和困难。想去回避和被免除也是可以理解的。但是被免除也就是让他人或者社会的某个体系去面对与困难和问题的挑战。这种状态会让人变得被动和无力。

对于这些，我想起一位神学家的话：“有一种困难是人生不需要去超越和克服的。”这不是肯定“吃苦耐劳”，而是在承受苦难中可以找到“人生的意义”。有的时候苦难不是一个人可以背负到底的。需要和别人互相帮助，与他人共同对待。回到这篇文章开头提出的“自己是什么存在”的问题上，如果只看自己是很难找出答案的。因为它的答案会在与他人的关联中具体浮现出来。

正因为与他人建立关系，相互弥补不足，人在困难面前才不会倒下。而且活着还可以体会自己存在的意义。“替代（帮助）别人”的意识不是在自己有余力的时候才应该有的。它随时被需要的理由也在人生的意义里。

最后，让我给大家介绍一下自己从十几岁时就非常喜欢读的思想家“布莱兹·帕斯卡（法语：Blaise Pascal）的著作《思想录》（法语：Pensées）。其中有这样一句话：“人的软弱不是认识到它的人，而是没有认识到它的人更容易暴露。”

生活在现今社会的人应该反复来体会这句话的含义。

P174 汉字总练习

一年

① ^{こうがい}梗概・^{はしげた}橋桁・^{さんばし}栈橋 ^{どんよく}貪欲・^{しゅうわい}収賄・^{こうにゅう}購入 ^{えつらく}悦楽・^{おんねん}怨念・^{いろう}慰勞

^{さぎ}詐欺・^{ふほう}訃報・^{せんさく}詮索 ^{ぎせい}犠牲・^{ぼくし}牧師・^{とっきょ}特許

② ^{そら}空が^{べに}紅に^{そま}染まる・^{こうちゃ}紅茶を^{のむ}飲む ^{ちめ}血眼になって^{さがす}探す・^{がんか}眼科に^{かよう}通う

^{うじがみさま}氏神様の^{まつ}祭り・^{しめい}氏名を^{きにゅう}記入する

③ ^{だんがい}弾劾・^{がいとう}該当・^{がいこつ}骸骨 ^{ていこう}抵抗・^{たんこう}炭坑・^{こうかい}航海

二年

④ ^{ほうふ}豊富・^{ひょうり}表裏・^{ずつう}頭痛・^{じょうい}讓位・^{かいぞく}海賊

有無ゆうむ	象牙ぞうげ	包含ほうがん	損得そんとく
氷解ひょうかい	船出ふなで	融点ゆうてん	施策しさく
嫉妬しっと	解雇かいこ		

⑤ ^{しきしだい}式次第 ^{さはんじ}茶飯事 ^{いちちやういっせき}一朝一夕 ^{ぼうじゃくぶじん}傍若無人 ^{ごんごどうだん}言語道断 ^{とういそくみやう}当意即妙

⑥ ^{かわ}川に^{はし}橋を^かかける（^か掛ける/^か架ける）

うるところが多い^{おお}講義（^{こうぎ}得る/^う売る）

おい立ちを^た記す（^{しる}老い/^お生い/^お追い）

事態を^{じたい}しゅうしゅうする（^{しゅうしゅう}収集/^{しゅうしゅう}收拾）

商品が^{しょうひん}きょうい^{てき}的に^う売れる（^{きやうい}脅威/^{きやうい}驚異）

⑦ ^{しぜん}自然を^{おそ}畏れる

^{じゅんび}準備に^{じかん}時間を^{つい}費やす

^{ともだち}友達に^{あやま}謝る

ありがたい^{ことば}言葉を^{たまわる}賜る

^{かわ}川を^{さかのぼ}遡る

三年

⑧ ^{ながうた}長唄を^き聴く ^{きゅうじょう}窮状を^{つよ}強く^{うった}訴える ^{ぶたにく}豚肉をいためる

^{ふせい}不正を^{きゅうだん}糾弾する ^{がんぐ}玩具を^{あた}与える ^{がくぶち}額縁を^{えら}選ぶ ^な中州に^{かす}わた

^{てきせつ}適切な^そ措置を^と取る ^{むぎ}麦が^{こがねいろ}黄金色になる ^{かんぬし}神主の^{はなし}話を^き聞く

⑨ ^{ぼくとう}木刀・^し竹刀 ^{てんぼ}店舗・^{しにせ}老舗 ^{おうとつ}凹凸・^{でこぼこ}凸凹 ^{こうさ}黄砂・^{じゃり}砂利

^{ざんねん}残念・^{なごり}名残 ^{さいたん}最短・^{もよ}最寄り

⑩ 感慨無量かんがいむりょう 万有引力ばんゆういんりょく
廃藩置県はいはんちけん 外科手術げかしゅじゅつ
武者修行ぶしやしゅぎょう 近畿地方きんきちほう

^{ことわざ}諺・^{こじ}故事^{せいご}成語

^{えど}江戸の^{てき}適を^{ながさき}長崎で^う討つ

(まったくかかわりのない^{ばしょ}場所や、^{すじみち}筋道の^{とお}通らぬところで^{しかえ}仕返しすること)

^{くち}口は^{わざわ}災いの^{もと}元

（^{ふようい}（不用意な^{はつげん}発言はわざわいをもたらすもとであるということ。）

^{きょう}郷^{はい}に入^{きょう}っては郷^{したが}に従^ええ

（その^{とち}土地^すに住^{ふうぞく}むには、その^{しゅうかん}風俗・習^{したが}慣^いに従^いうのが良^いい、という^い意味^み）

^{あたまかく}頭^{しりかく}隠^{さず}して尻^{さず}隠^{さず}さず

（^{じっさい}（^{けってん}実際には欠^{いちぶ}点^{かく}の一部^{かく}しか隠^{すべ}せていないのに、欠^{かく}点^{かく}の全^{かく}てを隠^{かく}しているつもり

にな^{げんじつ}って現^め実^めから目^{おろ}をそ^{おろ}らしている、愚^{おろ}かな^{おろ}さまを^{おろ}あ^{おろ}ざ^{おろ}ける。）

^{はら}腹^へが減^{いくさ}っては戦^{いくさ}が^{いくさ}で^{いくさ}き^{いくさ}ない

（^{くうふく}（^{なに}空腹^{ちから}では何^{ちから}をするにも力^{けっか}が入^えらず、よ^えい^え結^え果^えを^え得^えることは^えで^えき^えない。）

^{やすもの}安^が物^{ぜにうしな}買^{ぜにうしな}いの^{ぜにうしな}銭^{ぜにうしな}失^{ぜにうしな}い

（^{やすいもの}（^{ひんしつ}安^{おと}い^{おと}物^{おと}は品^{おと}質^{おと}が劣^{おと}るから、^{けっきょく}結^{たか}局^{たか}、高^いく^いつ^いく^いと^いう^い意^い味^いで^いす。）

^{しんしゅうかんじ}新^{しんしゅうかんじ}習^{しんしゅうかんじ}漢^{しんしゅうかんじ}字^{しんしゅうかんじ}

- | | | | | |
|---|--|---|--|--|
| ① | ^{ざんてい} 暫 ^{ざんしん} 定 ^{ぜんじ} ・斬 ^{ぜんじ} 新 ^{ぜんじ} ・漸 ^{ぜんじ} 次 ^{ぜんじ} | ^{せいふく} 征 ^{しょうめい} 服 ^{しょうめい} ・証 ^{せいかく} 明 ^{せいかく} ・正 ^{せいかく} 確 ^{せいかく} | ^{たんれん} 鍛 ^{ちんしゃ} 錬 ^{れんしゅう} ・陳 ^{れんしゅう} 謝 ^{れんしゅう} ・練 ^{れんしゅう} 習 ^{れんしゅう} | |
| ② | ^{ざぜん} 座 ^{ざぜん} 禅 ^{ざぜん} ざぜん | ^{むしちゅう} 蚊 ^{むしちゅう} 柱 ^{むしちゅう} かばしら | ^{しゆいろ} 朱 ^{しゆいろ} 色 ^{しゆいろ} しゆいろ | ^{いぶくろ} 胃 ^{いぶくろ} 袋 ^{いぶくろ} いぶくろ |
| | ^{しぶがき} 渋 ^{しぶがき} 柿 ^{しぶがき} しぶがき | ^{かわらばん} 瓦 ^{かわらばん} 版 ^{かわらばん} かわらばん | ^{せきひ} 石 ^{せきひ} 碑 ^{せきひ} せきひ | ^{なんくせ} 難 ^{なんくせ} 癖 ^{なんくせ} なんくせ |
| | ^{たてつば} 建 ^{たてつば} 坪 ^{たてつば} たてつば | ^{ほうがく} 邦 ^{ほうがく} 楽 ^{ほうがく} ほうがく | | |
| ③ | ^{そぞう} 塑 ^{そぞう} 像 ^{そぞう} そぞう | ^{しつぱい} 失 ^{しつぱい} 墜 ^{しつぱい} しつぱい | ^{だらく} 墮 ^{だらく} 落 ^{だらく} だらく | ^{かきね} 垣 ^{かきね} 根 ^{かきね} かきね |
| ④ | ^{おん} 忘 ^{おん} 恩 ^{おん} おん | ^{はなぞの} 花 ^{はなぞの} 園 ^{はなぞの} はなぞの | ^{こんじゃく} 今 ^{こんじゃく} 昔 ^{こんじゃく} こんじゃく | ^{いんそつ} 引 ^{いんそつ} 率 ^{いんそつ} いんそつ |
| | ^{たいよ} 貸 ^{たいよ} 与 ^{たいよ} たいよ | ^{たいしよく} 退 ^{たいしよく} 職 ^{たいしよく} たいしよく | ^{しんせん} 深 ^{しんせん} 浅 ^{しんせん} しんせん | ^{ゆうし} 雄 ^{ゆうし} 姿 ^{ゆうし} ゆうし |

8. 面向未来

回顾以往，憧憬未来。

P196

阅读文章，加深思考关于国际社会的人与人之间的关系。

课文：《一碗热汤》

作者：今道有信

1922 年-2012 年，出生于东京都，哲学家。著作有《自然科学序说》《人类生息圈伦理》《关于爱》《关于美》《追求智慧的光芒》等。本文为中学教材编写。



汉字

あたたかい 温暖	だいじ 第2次 第二次	せかいたいせん 世界大戦 世界大战	こうふく 降伏 投降	しゅうけつ 終結 终结	ぜんご 前後 前后
きら 嫌う 讨厌	せいねん 青年 青年	へいわさいてん 平和祭典 祭奠和平	せんご 戦後 战后	さんか 参加 参加	みとめる 認める 承认
こくさいてき 国際的 国际上	ひょうか 評価 评价	きびしい 厳しい 严厉	なげ 嘆く 叹息	こくひょう 酷評 批判	どくぜんてき 独善的 独断
みんぞくしゅぎ 民族主義 民主主义	こっか 国家 国家	けんきょ 謙虚 谦虚	せいげん 制限 限制	はんせい 反省 反省	じょうきょう 状況 状况
けいざいきこう 経済機構 经济机构	なかまい 仲間入り 参入	ゆるす 許す 允许	じだい 時代 时代	たいけん 体験 体验	こくさいせい 国際性 国际性

か する 書き記す	こうし 講師	つと 務める	しゅにんきょうじゅ 主任教授	しょうかいじょう 紹介状	げしゅく 下宿
书写	讲师	担任	首席教授	介绍信	宿舍
たずねる 訪ねる	しゅふ 主婦	ぎゃくさつ 虐殺	こじん 個人	うら 恨み	きも 気持ち
访问	主妇	屠杀	个人	仇恨	心情
りかい 理解	ことわ 断る	ひんそう 貧相	へや 部屋	す 住まい	へいぜい 平生
理解	拒绝	寒酸	房间	住宿	平生
しょくどう 食堂	ていしょく 定食	ほうがく 方角	ちが 違う	こくりつとしょかん 国立図書館	しら 調べる
食堂	套餐	方向	不同	国家图书馆	查找
まいばん 每晚	ゆうしょく 夕食	ふんいき 雰囲気	せき 席	てづく 手作り	りょうりてん 料理店
每晚	晚饭	氛围	座位	手工制作	菜馆
はくはつ 白髪	ははおや 母親	だいところ 台所	きつすい 生粋	びじん 美人	むすめ 娘
白发	母亲	厨房	地道的	美女	姑娘
かいけい 会計	うも 受け持ち	きも 切り盛り	かお 顔なじみ	わか 若い	ひじょうきん 非常勤
算账	担任	经营	面熟	年轻	临时
やす げつきゅう 安い月給	げつまつ 月末	かねづま 金詰り	じょうたい 状態	にくるい 肉類	しょくよく 食欲
微薄月薪	月末	手头拮据	状态	鱼肉类	食欲
ねは 値の張る	ちゅうもん 注文	す 済ませる	ひとりぶん 一人分	しゅうかん 習慣	なんかい 何回
高价	点菜	凑合	一个人的	习惯	几次
がくしゃ 学者	くろう 苦勞	だま 黙る	そ 添える	かんじょう 勘定	ようきゅう 要求
学者	受苦	沉默	加上	结账	要求
もうで 申し出	ひとさ ゆび 人差し指	くちびる あて 唇に当る	め わら 目で笑う	くび ふ 首を振る	ほか きやく 他の客
提出	食指	碰到嘴唇	眼睛微笑	摇头	别的客人
うと 受け取る	こころあた 心温まる	いご 以後	はんがく 半額	ににんまえ 二人前	さむ きせつ 寒い季節
收下	心里温暖	以后	半价	两个人的	寒冷季节

まず 貧しい夜 清贫夜晚	ほく い 北緯 北纬	い ち 位置 位于	みや こ 都 都市	く がつ なか 九半月ば 九月中旬	だんぼう 暖房 暖气
ひょう 電 が 降る 下電子	そこ 底冷え 从脚下冷	れい 例 によって 按照惯例	む り 無理 勉强	あか 明 りい 顔 表情明快	ま あいだ 待つ 間 等的时间
よ 読み 始め 开始读	にく み きゃく 二組の 客 两桌客人	にく りょう り 肉料理 肉菜	せ 曲 がる 弯着腰	ゆ げ た 湯気立つ 冒着热气	ち かよ 近寄り 走近
ふる 震える手 颤抖的手	さ だ す 差し出す 端上来	こ ぞ え ・ お お ぞ え 小声/大声 小声/大声	お 客 様 客人（敬）	と ま ち が 取り間違え 弄错	あ ま 余る 剩下
め あ 召し上がる 吃（敬语）	やさ しい ひと み 優しい 瞳 目光温柔	ま ち が 間違える 弄错	お 置く 放下	な み だ お 涙 落ちる 落泪	き ど 気取られる 走神
あ じ 味わう 品尝	つ ら め 辛い目 不幸的	あ 遭 う 遭遇	し ん せ つ 親切 热情/亲切	じ ん る い 人類 人类	ぜ つ ぼう 絶望 绝望
き ほん 基本 基本	な が 流れる 流利	の う り よ く 能力 能力	が く げ い 学芸 学艺	さ い き 才気 才气	じ ぎ ょ う 事業 事业
あ い て 相手 对方	た ち ば 立場 立场	じ か く 自覚 感觉	て ん け い 典型 典型	ゆ 行き ずり 素不相识	は 恥 じ ら い 耻辱
む し ょ う あ い 無償の愛 无偿的爱	き ち ょ う 基調 基础	へ い ぼ ん 平凡 平凡	に ち じ ょ う 日常 日常	た め 試す 考验	

《一碗热汤》

第二次世界大战是在 1945 年夏天日本投降后结束的。在这以前和以后日本被世界讨厌。你也许不相信，战后的一段时间，代表和平的世界青年体育节日（奥林匹克大会）都拒绝日本参加。在我们叹息国际评价太残酷以前，首先要接受这个严厉的评价。也要对日本过去唯我独尊的民主主义和国家主义深刻反思。在此情况下，

日本被拒绝进入世界的经济机构，日本和日本人都经历了一段悲惨的时代。在此我写下一篇发生在当时关于“国际性质”的真实故事。

1957 年我在巴黎的一所大学任教。刚开始的时候住在饭店，后来拿到首席教授的介绍信以后找到房子去和房东谈租房，没想到房东阿姨知道我是日本人马上拒绝租房，并对我说：“丈夫的弟弟在越南遭到日本兵的屠杀，虽然我对你个人没有仇恨，但绝不能让日本人住进这个家，你能理解我的心情吗？”没办法，我只好在学校为我找的寒酸旅馆继续住下。

我想讲的就是那个时期的故事。平时我在大学食堂吃自助套餐，只有在需要去和大学方向不同的国立图书馆查资料的星期六，每晚在饭店附近的一家小餐厅用餐了事。那家餐厅虽不奢华，但富有巴黎的气氛，是一个只能坐下十来个人的居家小店。满头白发的母亲在厨房做菜，她的漂亮女儿（地道的巴黎姑娘）负责接待客人和结账，店里只有她们两个工作人员。我每个星期六的晚上都在那里吃饭，这样过了两个月就成了那里的常客。

年轻的临时老师工资有限，特别是到了月末，我这个老外就开始手头拮据了。所以月末的星期六晚上不点蔬菜色拉，汤和鱼肉之类的菜，装模做样地对服务员说：“今天没有食欲”，然后只点一份价钱便宜的蛋卷凑合。因为这家餐厅的蛋卷还带一块面包。我这样点了几次菜以后，她可能觉察到这个年轻的外国学者到了月末就缺钱吧。

一天晚上，我点菜的时候又说：“只来一个蛋卷”，姑娘默默地将蛋卷和两块面包一起端来。巴黎的面包很便宜，我安心地吃下，去柜台结账。但是她并没有要我付面包钱。我还特意告诉她：“我吃了两份面包”，姑娘的食指轻轻地碰了碰嘴唇，眼睛笑咪咪的摇了摇头，示意我“保密！”。就这样她瞒着其他客人只收了我一份面包的钱。我顿时感到心里很温暖，用沙哑的嗓音说了声“谢谢”就出了店门。以后每次月末晚上去吃蛋卷，面包都是两份而且半价。

以后又过了几个月到了季节寒冷的二月，月末缺钱的晚上又来了。人们都把巴黎叫做“繁花之都”，但它位于北纬 50 度，是个比较寒冷的都市。有的地方九月中旬以后就通暖气，冬季更是冷到骨子里。那天晚上下着冰雹，我照例尽量微笑着只点一份蛋卷，一边读书一边等菜端来。店里还有两对客人，他们都在吃烤得很香的肉。就在这时，厨房里做菜的老母亲弯着腰端着一份热腾腾的汤朝我这边走来。她用颤抖的手把汤放在我的桌上，目光温柔地小声说：“我把客人点的菜弄错了，多出这碗汤。如果您不介意的话就喝了它吧。”这么小的店，我知道是不会把客人点

的菜弄错的。

就这样，我的面前放了一大碗冒着热气的洋葱奶汁菜汤。这份盛情对于又冷又饿的我是多么温暖啊！为了不让眼泪掉到碗里，我一勺一勺仔细地品尝这碗汤。在巴黎的那段日子里，虽然遇到过一些不友好的事，但是因为有这些人的好意让我从不讨厌巴黎。而且不只是这些，让我对人类也不至于绝望。

现在很多地方都在强调“国际化”，它的基本不是指在能力上可以说流利的外语，也不是在才能上具有超越的学艺以及规模宏大的事业。它应该是能够站在他人立场上的宽容和体贴，具有相互待人的友善意识。它的典范是巴黎那家小餐厅里的店员，对素不相识的外国人（我）表示出的腼腆素朴的“无偿的友爱”。它不是强求他人可以得来的“爱心”，这才是国际化的基本所在。所以我们每个人在平凡的日常生活中会随时经历它的考验。

P200

詩「わたしを束ねないで」

目标：从诗中的词语和表达中寻找作者的留言，并探讨自己的可能性

作者：新川和江（しんかわ かずえ）

1929年生，茨城县出身。诗人。诗集有《睡椅》《一个夏天，百个夏天》《罗马的秋季，其他》《不是比喻》《海与爱》等。本文来自《新川和江诗集》。

わたしを^{たば}束ねないで

わたしを束（たば）ねないで
あらせいとうの花のように
白い葱（ねぎ）のように
束ねないでください わたしは稲穂（いなほ）

秋 ^{だいち むね こ} 大地が胸を焦がす

^{みわた} 見渡すかぎりの金色（こんじき）の ^{いなほ} 稲穂

わたしを ^と 止めないで

^{ひょうほんばこ} 標本箱の ^{こんちゅう} 昆虫のように

^{こうげん} 高原から ^{えはがき} きた絵葉書のように

^と 止めないでください わたしは羽撃（はばた）き

こやみなく ^{そら} 空のひろさをかいさぐっている

^め 目には ^み 見えない ^{おと} つばさの音

わたしを注（つ）がないで

^{にちじょうせい} 日常性に ^{うす} 薄められた ^{ぎゅうにゅう} 牛乳のように

ぬるい ^{さけ} 酒のように

^{そそ} 注がないでください わたしは ^{うみ} 海

^{よる} 夜 と ^み ほうもなく満ちてくる

^{にが} 苦い潮（うしお） ふちのない水

わたしを ^{なづ} 名付けないで

^{むすめ} 娘 という名 ^{つま} 妻 という名

^{おもおも} 重々しい母 という名でしつらえた ^な 座 ^ざ に

すわ
座りきりにさせないでください わたしは風^{かぜ}

りんごの木と^き

いずみ
泉のありかを知っている風^{かぜ}

わたしを区^く切^ぎらないで

，（コンマ）や 。 （ピリオド）いくつかの段落^{だんらく}

そしておしまい「さようなら」があったりする手紙^{てがみ}のようには

こまめにけりをつけないでください わたしは終^{おわ}りのない文^{ぶん}章^{しょう}

かわ おな
川と同じに

はてしなく流^{なが}れていく 拡^{ひろ}がっていく 一^{いっ}行^{こう}の詩^し



中译

请不要束缚我

请不要束缚我

像紫罗兰的花一样

像白色的葱一样 捆在一起

我是稻穗

秋季 连大地都向往的

无边无际的金色稻穗

请不要让我停留
像标本盒里的昆虫一样
像从高原寄来的明信片一样 钉在那里
我要展翅高飞
不停地探索蓝天是多么宽广
侧耳倾听看不到的翅膀的声音

请不要将我倒入容器
像被日常冲淡的牛奶一样
像被烫热的酒一样 倒入杯里
我是大海
夜里 无止境涌出的
没有边界的洪水——苦潮

请不要给我称号
女儿的称号 妻子的称号
让我坐在责任重大的母亲宝座上 一动不动
我是风
知道苹果树和清泉所在的风

请不要把我断开
用逗号，和句号。分为一个个段落
像在末了写上一句“再见”的书信一样 草草结束
我是没有结尾的文章
与河川一样 不断流淌
自由扩展的 一行诗

P208 汉字 6

① たすうけつ と 多数決を採る。 し き と 指揮を執る。

ぼ ー る と ボールを捕る。 しゃしん と 写真を撮る。

② 事故の防止に努める。

議事の進行が妨害される。

③ 問題の核心に迫る。

技術革新が進む。

勝利を確信する。

④ 作物を収穫する。

商品を獲得する。

⑤ 危機に陥る。

手を携える。

教室が汚い。

⑥ 繁栄はんえい（隆盛りりゅうせい）
看病かんびょう（介抱かいほう）
濃厚のうこう（希薄きはく）
悲哀ひあい（歓喜かんき）